戦国武将を召喚して聖杯戦争で勝利を目指す

たくヲ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

聖杯戦争。魔術師七名と七体のサーヴァントが聖杯をめぐって争う。そんな世界に住むオリ主が、戦国武将を召喚し聖杯戦争に挑む。

そして、ランサー枠をとられたケイネス・エルメロイ・アーチボルトの召喚するサーヴァントとは一体⁉

目指すシリーズ第３弾。

目次

プロローグ　1
もう一つの召喚　6
開戦　15
英霊集結　32
情報整理　47
狂戦士　57
夢　69
聖杯問答　84
王と騎士　97
敗退　108
四日目　120
同盟　131

プロローグ

　冬木市民会館では、今日まで開館記念として日本歴史展覧会という、謎のイベントが行われていた。
　夕方。展示物が置かれている場所。館内ホールには、二つの人影があった。
「これで展覧会のすべての日程も終了、と。今回はこのような催し物を開いていただきありがとうございました」
　片方は冬木市の市長。恰幅の良い初老の男性だ。
「いえいえ。前も申しましたが、一昔前にここに来たときにここを気に入っていただけですので」
　もう一方は１８０センチほどの長身でしっかりとしたスーツを着こんだ若い男性。
「画仙(がせん)様が投資をしてくださったおかげでここまで早く工事も終わり、イベントの入場者数も上々、と素晴らしいお手並みでした」
「ははは。ご満足いただけたなら、私もうれしいですよ。あ、あと、展示物は明日まとめて宅急便で送っておいてください」
「分かりました」

　この物語を始める前に『魔術』と呼ばれるものについて説明しなくてはならないだろう。

『魔術』。魔力によってあらゆる神秘、奇跡を再現する術。

　魔力を生み出すには魔術回路が必要で、それが多ければ多いほど大量の魔力を生み出せる。

　魔術を使用するには詠唱を行うなどの特定の工程(アクション)をふむ必要がある。

　魔術よりも上。その時代の技術で再現できない神秘を振るうモノを魔法という。

　魔術を使うもののことを魔術師といい、彼らは魔術を研究することで全ての事象の出発点、『根源』を目指している。

　とりあえずこれだけ知っていてもらえればいいだろう。

　そして、先程登場した男。『画仙(がせん)工房』第２２代目最高責任者。『画仙壊善(がせんかいぜん)』も魔術師の一人である。

　その夜。画仙は市民会館内のホールにいた。今日の昼まで行われていたイベントの

展示物がいまだに周囲に残っている。
「お膳立ては完璧。あとはサーヴァントを呼び出すだけだな」
真新しい白い床を水銀で書かれた魔法陣が汚している。その前に立った画仙は詠唱を始める。
「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。
降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」
莫大な魔力が奔放しその場を満たす。ただの言葉ではない。確かな意味を持った言葉は魔術を発動するための工程の一つだ。
「閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。
繰り返すつどに五度。
ただ、満たされる刻を破却する」
人がだれ一人いない市民会館に彼の声のみが響いている。人払いは完璧。
「――――告げる。
汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ!!」

これから始まるのは、聖杯戦争。七人の魔術師と、呼び出されし七体のサーヴァントがたった一つの聖杯をめぐって殺しあう大儀式だ。

「誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者」

いまこの場に、七体のサーヴァントの一体が召喚されようとしていた。

「汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――――！」

魔法陣からあふれた莫大な閃光がホールを覆い尽くした。

その閃光がはれた時、魔法陣の中心にいたのは一人の東洋系の男。鹿の角をあしらった兜。軽量感のある鎧に身を包んでおり、長大な槍を持っていた。

その威圧感は間違いなくサーヴァント。歴史に名を残し、功績が信仰を生みだしたという英霊のものだ。

鎧の男は言う。

「聖杯に導かれ槍兵として参上した」

外見から連想できるそのままの低い声がホールに響く。

「ここに問う。おぬしが儂の使えるべき主か？」

画仙はそれまでの表情は驚きの一言で表せるようなモノだった。が、その

「その通りだ。俺は画仙壊善。俺に力を貸してくれるか？」

「無論、儂にも目的がある。此度の主はおぬしとはいえ協力してもらうぞ」

「よろしく頼む」

ここに、一組の陣営。ランサー陣営が誕生した。

もう一つの召喚

　自らのサーヴァントの真名を聞いた後、画仙は彼のことをランサーと呼ぶことにした。日本人の英霊をランサーと呼んでよいのかと、画仙は疑問に思ったが、ランサーは
「いいだろう。そう呼ばねば、儂が不利になるのだろう？」と簡単に了承した。
「改めて名乗らせてもらうが、俺の名は画仙壊善（がせんかいぜん）。魔術師だ」
「画仙、か……」
「どうした、ランサー？俺の名がどうかしたのか？」
　ランサーが自分の名字を聞いて考え始めたのを見て、画仙は問いかける。
「おぬしと同じ性を持つ男をを儂は知っていてな。儂のこの槍は違うが、儂の配下にその男の造った武具を持つ者がおったのだ」
「間違いなく俺のご先祖様だな」
「むう？」
「俺は『画仙工房』第２２代目最高責任者だ」
「……ほう。あの男の子孫であったとはな。あの男、随分と女っ気がない生活をしておったが……まさか、自らの血を後世に残しておったとは、驚いた」

『画仙家』。安土桃山時代に初代『画仙峰傘』を開祖とし始まった、武器職人の一族である。そこで造られた武器は正宗・村正に並ぶとされていた。歴史の流れというふるいにかけられた末、その名は現代まで伝わることはなかったという。ちなみに、魔術の家系が始まったのは3代目である。

「ならば、問わねばなるまい」

「なにをだ？」

「おぬしは聖杯とやらに何を望むのか、だ。儂はおぬしの先祖とはともに酒を飲み交わした仲だ。故におぬしが何をなそうとするのかを知ることで、あの男の血が絶えておらぬことを知ることになろう」

画仙は少し考え、言う。

「俺の望みは……神々の武具の設計図だ」

「ぬう？それは何故だ？」

「俺は『究極の武具など存在しない』と思っている。だが、俺はそれに近いものを、究極に限りなく近づいた武具を造りたい。そのためにはまず数々の武器を作る必要があるだろう。だから、まずは手始めに神々の武具の造り方を知れば、そこから究極に近づけるかもしれないと思って、な」

しばしの沈黙。数秒、数十秒後。ランサーは口を開いた。

「神の武具でさえ理想ではなく、さらに上を目指すか……。よかろう!!儂はおぬしに仕えようではないか!!」

「待った!!……俺はまだ聞いていないぞ。ランサー、お前程の英霊が聖杯に願うこととはなんだ？」

　画仙はランサーを呼び出した後に聞いた真名で、間違いなく自分の呼び出した英霊は最強クラスの英霊であると確信していた。

　だからこそ、解せない。心当たりこそあるが、それは目の前の男が願うとは思えないことだった。

「……わしの望みは強者（つわもの）との戦（いくさ）だ」

　ランサーは続ける。

「儂は生前数々の兵（つわもの）、強者（つわもの）と戦の中で出会い、この槍で斬り捨ててきた。だが、数万の兵（つわもの）にも、どれだけの強者（つわもの）にも、儂に刃が届いたものはおらぬ。故に儂は、儂と互角に渡り合うことができる者と戦いたいのだ」

「つまり聖杯にかける望みは……」

「ない」

　画仙は驚きはしたものの、この英霊の生前の逸話を知っていたが故、この言葉が偽りだとは思わなかった。

「この聖杯戦争に出る者は、皆が歴史に名を遺した英雄の霊であると聞く。それも、儂らの国の外に住んで居った者だそうではないか。……この国にはいなくとも、外には儂を満足させうる者がおるやもしれん」
「……わかった。ランサー。お前の願いの成就にできる限り協力しよう」
「かたじけない」
　すると、画仙はふと思いついたように言う。
「そういえば、事前に調べた資料だと東洋の英霊は召喚されないそうなんだが？」
「聖杯戦争とやらは、人間が始めたものらしいではないか。ならば、それがほんの些細なことの組み合わせで崩れることもあろう。時代の移り替わりや必要とされておる者が変わったことで、儂が幕府から遠ざけられたことのように、実にあっけないことで、だ」
「なるほどな」
　ランサーの言うとおり、聖杯戦争に呼ばれるはずのない東洋の英霊が召喚されたのは、些細なことの組み合わせのせいであった。
　一つ。聖杯が『この世全ての悪（アンリ・マユ）』によって汚染されていたこと。
　二つ。召喚主である、画仙の用意した聖遺物。
　一つ目は言わずもがなだが、二つ目の画仙の用意した聖遺物が大きな問題であった。召喚を行ったホールには、今日まで行われていたイベントでの展示物（画仙の提供）が

置いてあった。その展示物は大半が聖遺物であった。戦国時代の武士の使用していた箸や刀。鉄砲。馬の手綱など。地味ではあるが数々の英霊の触媒、縁の品であった。

召喚場所の近くに置いてあった、それらのどれを依り代に英霊を呼び出すか聖杯が処理できず、結果として呼び出せてしまった。

これが原因だったのだが……画仙とランサーには知る由もなかった。そもそも、画仙がこの冬木市民会館を召喚場所に選んだのは、一番新しい霊脈があったからであり、それ以外の理由はなかった。

「さて、行くぞ！ランサー!!」

「うむ。まずは戦の準備だな」

こうして、彼らは冬木市民会館を後にした。

ホールではランサー召喚の依り代になった、小刀の刃が光り輝いていた。

時計塔の魔術師、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは、婚約者のソラウ・ヌァザレ・ソフィアリとともに冬木市ハイアットホテルの一室にいた。
時計塔にて教え子であるウェイバー・ベルベットにサーヴァント召喚のための触媒、征服王イスカンダルのマントを盗まれてしまったため、急ぎで触媒を用意するよう手配させていたのだが……。
「ケイネス。召喚の準備は終わったわよ?」
「ああ。始めるとしよう」
結局触媒は手に入らなかった。
「(だが、私はこの戦いに出なければならない……。このまま何もせずのこのこと帰っては、時計塔での私の立場はどうなる? 私の名誉のため、ソラウとの未来のためにもこの戦い勝利しなければならない)」
触媒こそないがサーヴァントは召喚できる。その英霊こそ誰になるかわからないが、それで弱い英霊がサーヴァントとして呼ばれたとしても、その英霊とともに聖杯を勝ち取ることができれば、『弱いサーヴァントを召喚しても、聖杯戦争に勝利できた者』としてケイネスの評価はあがるだろう。
ケイネスとソラウはサーヴァント召喚の魔法陣の前に並んで立つ。

ケイネスは聖杯戦争のサーヴァント召喚用魔法陣を独自に研究、改造していた。よってその魔法陣にて召喚されたサーヴァントに対する絶対命令権である令呪をケイネス、サーヴァントの現界を保つ魔力供給をソラウがそれぞれ担当するようになっていた。これで、ケイネス自身が魔術師と戦う時にも、サーヴァントに彼の魔力をとられることはない。

ケイネスは詠唱を始める。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。
降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ
閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。
繰り返すつどに五度。
ただ、満たされる刻を破却する」
魔法陣が光を放つ。
「――――告げる。
汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

光が強くなるにつれ、ケイネスの体に時計塔での降霊術でとは違う妙な感覚が走る。
「誓いを此処に。
我は常世総ての善と成る者、
我は常世総ての悪を敷く者。
汝三大の言霊を纏う七天、
抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――――！」
閃光にケイネスとソラウの目がくらむ。
その光が消えた時、魔法陣の上にいたのは……。
「問おう。貴殿(あなた)が私をキャスターの位にて召喚せしめたマスターで間違いないな？」
そこにいたのは、豪奢なローブを着て、右手の中指には真鍮と鉄でできた指輪。左手には一冊の書物を持っている男だった。
ケイネスは自分の召喚した英霊が、７つのクラスの中でも最弱とされるキャスターだったことに内心では落胆していたが、それを表情には出さず言う。
「そうだ。私の名はケイネス・エルメロイ・アーチボルト。そして、私の婚約者であるソラウ・ヌァザレ・ソフィアリだ」
「なるほど。サーヴァントに対する魔力供給と、マスターである証である令呪の役割を分けるとは。……なかなかに優秀なマスターのようだ」

「(たかだか、サーヴァント風情が偉そうに。私をなんだと思っているのだ!?)」
「よいだろう。ケイネスのサーヴァントとして、私は行動する。ただし、私の行動に制限を付けないでもらおう」
ケイネスの感情が怒りの一色に染まった。サーヴァント風情が魔術師の名門、アーチボルト家九代目当主である自分にこのような口を利くこと自体に怒っていた。
「ケイネス・エルメロイが令呪を持って告げ「呼び出したサーヴァントに対する強制命令権。それが令呪だったな」……なんだ?」
「ならばそれは私には効かない。何せ私の得意魔術は『召喚』『使役』『契約』だからな」
ケイネスはその言葉に令呪を使うのを止めた。現代には存在しないほど強大な魔術師・魔法使いが召喚されるキャスターの英霊の言葉であるが故にその言葉に偽りがないと理解できたからだ。
今のやり取りで冷静さを取り戻したケイネスは問う。
「……貴様の真名はなんだ? 聖杯に何を望む?」
「私の名は……」

開戦

遠坂邸での戦闘によりアサシンが敗退。使い魔を通してそれを知った聖杯戦争のマスターたちは、どこからか忍び寄る暗殺者の脅威が消えたことにより本格的に動き出す。

そんな中で、ランサーのマスターである画仙壊善はランサーとともに夜の倉庫街で敵対するサーヴァントを待ち構えていた。

ランサーにあからさまにサーヴァント気配を振りまかせることで、ほかのサーヴァントを挑発しているのだ。

ランサーは鎧姿。

画仙は動きやすいように作った黒のスーツ（やけにポケットが多い）を着こんでおり、背には大太刀、腰からも打刀を下げていた。

「しかし、この時代は驚かされるのう。まさか鉄の塊が地を駆け、鉄の鳥が空を飛び交っておるとは。聖杯から得たの知識で知ってはいたが実際に見ると圧倒させられる」

「バイクでも乗ってみるか？」

「あの鋼鉄の馬か……。あれが儂の時代にあればのう。儂も面白かったのだが」

　このランサー実はランクＣの騎乗スキルを持つことが本人の言葉で分かっていた。ランクＣともなれば馬など様々な動物を乗りこなすことが可能となる。ならば、近代の乗り物を乗りこなせても不思議ではない。
「……っと、どうやら挑発に乗ったものがおるようだ。ここ向かって来おる」
「さて、これからが本番だな」
「儂を楽しませてくれるとよいが……」

　倉庫街にやってきたのは黒系のスーツに身を包んだ男装の美少女（もはや美少年といっても差支えのない着こなしだったが）。そして白系の服を着た銀髪で赤い目のどこか気品を漂わせる女性だった。
「正直なところもはやだれも来ないのかと思うたぞ。ここまであからさまに気配を振りまいておるというのに、出て来おったのはおぬしだけとは……古今東西の英霊というのもあまり期待できたものではないのう」
　男装の美少女は自らの敵が持つ長槍を見て言う。
「お前はランサーに相違ないな？」
「確かに今はそう呼ばれておる。……そう言うおぬしはいったいどの位にて呼び出され

たのだ？」

「私はセイバーの位にて参戦した」

「しかし」

ランサーは言う。

「戦争だというのにまさか初戦の相手が女だとはな」

「……私を侮辱しているのか、ランサー？」

「いや、儂の時代にもそういうものはいたが、そやつらは大抵が隠密でな。それに、剣士の位でこの戦場に出向いたとあってはかなりの猛者であろう？むしろ称賛の言葉と思うてもらいたいのう」

「ほう、それはありがたく受け取っておくとしよう」

そこまで言って男装の美少女……セイバーの衣服は魔力にて編まれた甲冑に変わっていた。それは白銀と紺碧に輝く甲冑。頭を守るヘルムはなく、その端正な顔立ちをさらしている。

武骨な鎧兜姿のランサーとはまさに対になるような姿であった。

「セイバー……気をつけて私でも治癒呪文のサポートくらいならできるけど、それ以上は……」

セイバーのとともにここにやってきた女性は言った。彼女は英霊同士の戦いに自分

の割り込む余地のないことを直感にて理解していたからだ。
「ランサーはお任せを。ただ奴の隣のマスターが気がかりです。途中で貴女に攻撃を仕掛けてくるかもしれない。注意しておいてください。……アイリスフィール、私の背中は貴女にお任せします」
その言葉とともに向けられた翡翠色の瞳はその女性……アイリスフィールにセイバーが信頼をおいていることを語っていた。
「……わかったわ。セイバー、この私に勝利を」
「はい。必ずや」
そう頷いてセイバーはランサーに向き直る。
「では、いざ……参る!!」
「行くぞ!ランサー!!」
そして英霊同士の戦いが始まった。

画仙壊善は驚愕していた。
英霊同士の戦い。高速で剣と槍が打ち合い、鍔迫り合うたびに破壊的な衝撃波と音がまき散らされる。

普通の人間では目で追うことすら困難な戦闘。だが、画仙はそれを完全に補足していた。
　画仙家は武器職人の家系である。そのため、その家が強力な武器を造るために強化魔術に走るのは必然であった。
　ガラスに使えば固くなり、棒状に丸めた新聞紙に使えば鉄と打ち合えるほどに強くなる。それが強化魔術。
　あらゆる魔術の基礎であるがゆえに極めるのが困難とされるその魔術だが、武器職人と魔術師との両立にはこれ以上ないほどふさわしい魔術であった。炉に使って火力を強め、鍛える前の鉄に使ってより強い武器になるように促し、鎚に使って熱した鉄により力強い一撃を打ちこむ。それによって、画仙家はより強い武器を生み出していった。
　そして現在の『画仙工房最高責任者』画仙壊善の身に宿した魔術刻印には強化魔術のみが刻まれている。普通の魔術師として生きていくことを望んだ彼の妹には強化以外の魔術刻印を、武器職人の道を選んだ壊善には強化のみの魔術刻印を分配したのだ。魔術刻印の複製は不可能。ならば真っ二つに分割してそれぞれに必要な魔術を与えておけばいいじゃないか、という先代『当主』にして先代『画仙工房最高責任者』である父の起点によるものであった。よって画仙家『当主』は彼の妹、『画仙工房最高責任者』は壊善という現状になっているのだが……。

閑話休題

彼の腕に刻まれた魔術刻印が視覚強化、判断速度強化、人体における限界の強化を自動で発動していることにより、完全にサーヴァントの動きの補足を行える。

(なるほど、これが英霊の戦闘。……聖杯戦争か)

それを見て興奮する自分がいる中で、彼は現状を冷静に見極めていた。

(セイバーと共にいるアイリスフィールとかいう女。赤い目に銀髪……といえばおそらく、御三家のひとつアインツベルンのホムンクルスだろう。……だが、おそらく、セイバーのマスターではないいな)

彼がそう思った理由は簡単だ。アインツベルンは冬木の聖杯戦争に第1次より参戦している。それも知識を与えるのが容易なホムンクルスで、だ。アインツベルンのマスターなら聖杯戦争の定石である、少なくともサーヴァントからは隠れて行動する、を行っていない。おそらく、マスターは別にいて彼女は囮ということだろう。

(サーヴァントステータスはランサーの方が高いな……当然か)

聖杯戦争のマスターにのみ与えられるステータス読み取り用透過能力により、画仙が読み取ったセイバーのステータスは、

クラス　　　セイバー

属性　　　　秩序・善

ステータス　筋力　Ｂ　魔力　Ａ
　　　　　　耐久　Ａ　幸運　Ｄ
　　　　　　敏捷　Ａ　宝具　⁇

と高数値、流石は最優クラスといったところだろう。だがランサーのステータスは

クラス　　ランサー
属性　　　秩序・中庸
ステータス　筋力　Ａ＋　魔力　Ｃ
　　　　　　耐久　Ｃ　幸運　Ｂ
　　　　　　敏捷　Ａ＋＋　宝具　⁇

と耐久と魔力以外。打ち合いに必要な数値は圧倒的である。サーヴァントのステータスは『マスターの魔力量・相性』『召喚された地域での知名度』『英霊自身の強さ』により変動する。

今回は画仙の魔力供給が十分になされていること（画仙壊善の魔術回路はメイン７０本サブ３５本）と、ランサーが日本の英霊であり知名度が高いこと、英霊としての戦闘力が元々日本でも高位であることが原因だろう。

事実、ランサーはセイバーをおしていた。セイバーが西洋の英霊であり、西洋と東洋の槍術の差異によるものや、ステータスの筋力、敏捷の数値の差という違いが大きく出

ているといえる。

それでもセイバーがいまだに傷を負っていないのは、剣を隠す宝具『風王結界（インビジブル・エア）』の恩恵だろう。とはいえ、ランサーは不可視の剣に攻めあぐねているものの、打ち合ううちにおおよその剣の間合いを理解するだろう。

（ランサーには戦いを存分に楽しんでもらうとして、俺はマスターやら使い魔やらの探索でもするか）

『わが耳はすべてを聞き取る兎の耳なり』

詠唱により彼の聴力を強化。周囲の陰から見張るものを探り取る。彼の耳に多数の音が入り込んでくる。

「舞弥、その位置からランサーのマスターを狙えるか？」

「……狙えますが、ランサーとセイバーの戦闘の余波で外れる恐れがあります」

という声が画仙達のいるところで点対象になる位置に一つずつ。

「……もう、おろして……」

「ほおう、ランサーもセイバーもなかなかの猛者ではないか。気に入ったぞ。死なすには惜しい」

という泣き言とやけに上機嫌そうな声の二つが鉄橋の上から。

何かが蠢くような音と浅い呼吸音が倉庫の中から。

「なぜこの私がサーヴァント風情に命令されなければならんのだ」
「なんなら、あのホテルにソラウ共々引きこもっていてもよかったのだぞ？」
外の車の音。空の飛行機の音。波音。
進路をこちらに向け道路を歩いてくる二人の声。
ここには魔術関連の声のみをまとめたが、実際は、倉庫街の周辺2キロメートルは画仙にとっての補足範囲に入っていた。
(ここまでいるとはな。まあ俺たちがそうなるように仕向けたんだが……。鉄橋の上は距離がありすぎるし片方はサーヴァントだろう。倉庫の中の奴は……謎が多すぎる。近づいてくるのはまだ手を出す必要がない。となると、近くで監視している奴らのどちらかがセイバーのマスターか?男の方が命令しているあたり舞弥と呼ばれていた女がサーヴァントの可能性もあるが、それなら俺の首がとうに跳んでいてもおかしくない……とりあえずは舞弥とやらを狙うとしよう)
『わが脚は駆ける馬のごとく』
足に強化を施しそこから跳ぶ。
目指すのは、隠れて画仙を狙う二人組の片方。

久宇舞弥にとってセイバーのマスターである衛宮切嗣は師である。ただしこれは切嗣が彼女に魔術を教えたからであり、魔術をただの手段としか思っていない『魔術師殺し』衛宮切嗣にとって彼女は戦場において自らを正常に機能させるための手足でしかなく、彼女もそれを理解し了承していた。

彼女が切嗣の手足として動いていた時間は長く、切嗣とともにあらゆる魔術師を葬ってきた。さらに切嗣がアインツベルンに雇われてからも２・３人の魔術師を仕留めてきた。

そんな彼女は一人の魔術師と対峙していた。

「さて、とりあえずその物騒なものをおろしてもらおうか」

彼女の前にはやけにポケットの多い黒服を着た、ランサーのマスターと思われる男。打刀を手に持ち、背には大太刀を背負っている。

男に対し、舞弥は無言で手に持つステアーＡＵＧを発砲。連続射撃を行う。

弾丸は男に吸い込まれるように飛び込んで行き……男の武器によってはじかれた。否、それを武器と呼ぶには語弊がある。それは先程まで打刀であった物が今は盾へと変貌していたのだ。舞弥が狙いを変えても男は盾で弾丸を全て弾く。

それを見て弾丸が効かないことを悟った舞弥は撃ちながらじわじわと接近、弾切れに合わせ銃を投げ捨て、サバイバルナイフを抜き取る。
男が持っていたものはいつの間にか打刀に戻っていた。男が振り下ろしたそれをナイフで弾きつつ懐に踏み込む。
……違和感があった。打刀は間違いなく戦国乱世の兵が打ち合った刀だ。それを男が振り下ろしたのにナイフで簡単に弾けたこと。
違和感は戦闘においてすぐにでも答えを示す。男は打刀を左手のみで振り下ろし、右手で大量のポケットの一つに隠していたナイフを取り出していたのだ。
男のナイフで舞弥のサバイバルナイフが受け止められ弾き返され、さらに、ナイフによる一撃がサバイバルナイフに向けて叩き込まれる。
「随分と安物を使っているようだな」
舞弥のサバイバルナイフが根元から折れる。舞弥はぐさま予備のナイフを引き抜きそれで続く敵の攻撃を防ごうとして……男の左手で服の右袖を捕まれた。男は右手のナイフを地面に投げ捨て、そのまま舞弥の胸倉をつかみ左手を引き体制を崩す。そのまま向きを反転しつつ舞弥を地面に叩きつけた。
柔道における一本背負い。受け身もとれずに背中から地面に叩きつけられた舞弥の肺から強制的に空気が吐き出される。呼吸困難に陥って地面に転がっている舞弥に、男

はナイフを投げつける。
　強化を施したナイフが舞弥の服と地面を縫いとめる。対峙から２０秒にも満たず、舞弥は完全に無力化されてしまったのである。

（とまあ、とりあえず無力化してみたが……あれはマスターじゃないな、マスターなら、サーヴァントの一人や二人呼び出すはずだろうしな……いや、二人はないか）
　舞弥と戦っていた男、画仙壊善は自ら地面に投げ捨てた武器を拾い集め、舞弥が落とした武器も回収。再び、先程のサーヴァント同士の戦場っを観戦しに戻っていた。
　とりあえずもう一方の男に狙撃される可能性もあるため、視覚強化：範囲拡張と聴覚強化を併用し、もう一人の暗殺者の動きを監視している。
　なお、先程倒した舞弥と呼ばれていた女の意識を奪わずに拘束したのは、すぐ近くに彼女の無線を置いておくことで、もう一方の男が彼女の方に意識をさく可能性を期待してのものである。結果、男は彼女の所に移動し始めており、その策は成功したことを意味していた。
　ランサーとセイバーの戦いは完全にランサーがおしている。不可視の剣の刃渡りを

見極めたのか、先程までとは比べ物にならないほど苛烈に攻め立てる、ランサー。おそらく、あと1分足らずで決着がつく。

……どこからか雷鳴とともに声が聞こえてくることに気が付いたのは画仙が最初だっただろう。彼はその音が聞こえる方を見る。遅れてサーヴァント達や、アイリスフィール、隠れている者の目がそれに集中する。

「AAAALaLaLaLaLaie!!」

空から雄叫びとともに現れたのは二頭の牡牛が引く戦車（チャリオット）。牡牛が虚空を踏みしめるたびに雷鳴が轟き、稲妻が広がる。それの纏う圧倒的な魔力はそれが宝具であることを意味していた。

あっけにとられるランサーとセイバーの間に降り立った戦車（チャリオット）。おそらくその操り手であろう鎧をまとった大男は、御者台の上で両手を大きく広げる。

「双方、武器を収めよ!王の前であるぞ!!」

とんでもない威圧感とともに放たれる声。とはいえ、戦場で武器を収める者など、英霊にいるはずもない。

「我が名は征服王イスカンダル!此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した」

さらに、真名までばらした。後ろで彼のマスターと思われる小さい男が慌てているが

完全に無視している。
「いきなりだが、双方余に聖杯を譲り、我が軍門に降る気はないか!? さすれば余は貴様らを朋友として遇し、世界を征する愉悦を共に分かち合う所存である！」
その英霊、征服王イスカンダル。またの名をアレクサンダー。なるほど、確かに英霊と呼ばれるのにふさわしい英霊だが、
(あの、男にはご愁傷様と言うほかないな)
その自由奔放さは常軌を逸していた。……とはいえ、それが彼を英霊たらしめているのかもしれないが。
「なるほど。なかなか面白いことを言うのう。だが、儂が求めるのは強者（つわもの）との闘いのみ。おぬしの軍門に降ってはおぬし自身と戦えぬではないか」
「そもそも貴様はそのような戯言を述べ立てるためにランサーとの一騎打ちを邪魔したというのか？だとすればそれは、騎士として許しがたい侮辱だ」
そう言われて一瞬落ち込んだように見えたライダーはすぐに持ち直し言う。
「対応は応相談だが？」
「「くどい!!」」
ランサーとセイバーに一喝され、かの征服王も流石に諦めたらしい。
「……私も王としてブリテンを治める身。貴様に降るわけにはいかない」

「ブリテン？　ということは貴様がかの騎士王か？……まさか、このような小娘であるとはなぁ」
「その小娘の一太刀を浴びてみるか？」
　王同士の会話を聞きながら画仙は考える。
（なんか、セイバーも遠回しに真名ばらしてるんだが。……王ってのはこんなのばっかなのか？）
　そんなことを思いながらも聴覚強化により探っている他の者たちの動きも思考に取り入れる。
（こちらに向かってきた二人は……片方がいない？　霊体化して向かってきているのか？　あの男はこちらの監視を再び始めたようだ。鉄橋の上の奴らがこのライダーとライダーに食ってかかっている青年で。倉庫の中の男に動きはなし）
　そこまで思考したところで周囲でものすごくかすかな音が聞こえるのに気が付く。
（おいおい……波音かと思ってたら……こいつは拙いな）
　先程から聞こえる波音のように途切れずに聞こえる音。そのかすかな音を画仙の強化された聴覚が感じ取っていた。
　いつの間にか周囲を覆っている大量の蟲の蠢く音を感じとって身を震わせる。
　その数は５０以上。おそらく火炎放射器でもなければ突破できないであろう蟲、蟲、

蟲。幸い襲いかかってくる気配はないが、画仙のような強化魔術師にとって厄介なのは小さい蟲の集団。集団殲滅用の魔術、宝石魔術などなら恐れるに足りない敵なのだろうが。

　一応、魔術刻印による強化魔術で耐久を強化する。気休め程度にはなるはずだ。

「さて、今、闇にまぎれて覗き見しておる連中がいるだろうが!!」

「どういうことだ?ライダー」

(俺以外にも気づいている奴がいたのか。サーヴァントなら当然か?……いや、ランサーとセイバーは気づいてなかったようだし、ライダーはかなり強いのか?)

「セイバーにランサーよ。うぬらの真っ向きっての競い合いまことに見事であった。だがあれほど清澄な剣戟を響かせては、惹かれて出てきた英霊が余一人とあっては英霊が聞いてあきれるわい」

　ライダーは笑顔とともにサムズアップ(親指を立てて)して言った。

「聖杯に招かれし英霊は今ここに集うがいい!なおも顔見せを怖じるような臆病者は、この征服王イスカンダルの侮蔑をまぬがれぬぞ!!」

　倉庫街に響きわたる声。

　その余韻が冷めやらぬうちに現れたサーヴァントがいた。

「ほう。何やら騒がしい故来てみたが。なかなかに優秀そうな者がいるではないか」

近くのコンテナの上。豪奢なローブを着て、指には真鍮と鉄でできた指輪。左手には書物を持った男がたっていた。

英霊集結

「おお、現れよったか！」
　ライダーが上機嫌で言う。
「おぬし、いったいいかなる位にて召喚されたのだ？」
　ランサーが問う。
「私はキャスターのクラスにて召喚された」
　キャスター。このクラス名が出た時にその場にいた全マスターが驚いた。
「どうして、キャスターがこんなところに!?」
　ライダーのマスター……ウェイバー・ベルベットの言葉はその場にいたマスターたちのほぼ全員の持っていた考えを代弁していただろう。
　アサシンは純粋な戦闘力が理由で最弱。キャスターは大抵のサーヴァントは高い耐魔力を備えていることが理由で不利だとされる。
　そのため、聖杯戦争においてはアサシンは『気配遮断』のスキルを生かした、マスターの暗殺。キャスターは『陣地作成』のスキルにより有利なフィールドを作ることで、ほかのサーヴァントとまともに拮抗できるとされている。

そんなキャスターが、なぜこのサーヴァントが多く現れた倉庫街に現れたのか。
「まあ、いいではないか。おい、キャスターのサーヴァントよ、我が軍門に降る気はないか? 余とともに世界を駆け征する悦びをわかちあえる朋友となれるであろう」
またも誘いをかけるライダーにその場にいたものたちは唖然とする。
「面白い誘いではあるが……断らせてもらおう。貴殿の軍門に降るのも悪くはないが、あいにく私は貴殿のように世界を駆けまわるのにはむいてないのだ」
「交渉決裂かぁ」
「『交渉決裂かぁ』、じゃねぇよ!! 何やってんだよ、ライダー!!」
そう言って、ライダーを怒鳴るウェイバーだったが当の本人は全く気にする様子がない。
『そうか。よりにもよって貴様か』
ウェイバーの顔が引きつる。倉庫街に冷やな侮蔑と憎悪を交えた声が響く。
『一体何を持って私の聖遺物を盗み出したのかと思えば、まさか君が聖杯戦争に参加する腹だったとはねえ。ウェイバー・ベルベット君』
ウェイバーは思わず恐怖に震える。ウェイバーと響いてきた声の主、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトとの関係は時計塔における生徒と講師である。ウェイバーはその時計塔で幾度となく味わった侮蔑にはたえることはできただろう。上から見下す憐憫

の視線も耐性がある。
　が、それに加えて彼に向けられていた明確な敵意は彼の人生で初めての物であった。ウェイバーの体が震える。今すぐうずくまりたくなるような、今すぐ耳をふさぎたくなるような、そんなプレッシャーに押しつぶされそうになる。
『残念だ。実に残念だ。凡俗は凡俗らしく平お「黙っていろ、ケイネスよ」っ!?』
　ケイネスの言葉を制止させたのはキャスターだった。キャスターはコンテナから飛び降りる。
「ケイネスよ。この場に自ら姿を見せぬマスターなど、そこの征服王も狙い下げだろう。幸運と思っておけ。貴殿が仮にこのライダーのマスターになったところで、最悪殺されるのが落ちだ」
　ケイネスはわずかに歯噛みしたようだ。キャスターはライダーの方を見て言う。
「すまないな。征服王。私のマスターが貴殿のマスターをけなすようなことを言って」
「いやいや、あのまま言い続けておれば流石に余も一言言っておっただろうしなあ」
「……忘れていたな。先程の問いに対しての答えがもう一つあったのだ」
「む、今更どうしたのだ?」
　ライダーは疑問をそのまま顔に浮かべ言った。
「本当は言うつもりもなかったが、私のマスターの無礼はサーヴァントがつぐなうべき

だろう。……私はもともと一国を束ねし者。貴殿の下に降るのは性に合わん」
「ほう、となればうぬも王の一人ということか?」
「そうなるな」
そこに新たな存在が現れる。黄金の光が街灯の上に集まる。そこに現界したのは黄金のサーヴァント。
その場にいたマスターたちがその黄金の鎧姿を見間違えることはない。それは先日、遠坂亭にてアサシンを圧倒的な力を持って殺害したサーヴァントだったからだ。
「この我(オレ)を差し置いて、王を名乗る不埒者が、一夜で3匹も涌くとはな」
(いまだにクラスのわからないサーヴァントは2体。余るクラスはアーチャーとバーサーカー。喋ったということは理性があるか。ということはアーチャーで間違いないだろうな)
冷酷かつ無慈悲な視線をライダー、セイバー、キャスターに向ける。流石にこれほど高飛車なサーヴァントが現れるとは、その場のだれもが想像していなかった。
「難癖付けられたところで、余はこの世に知れ渡る征服王なのだがなあ」
「たわけ。真の王など、いつの世であれ天上天下に我ただ独り。それ以外は有象無象の雑種にすぎん」
その言葉を黄金のサーヴァントはなんでもないことのように言い放つ。おそらく

アーチャーは自身のみが王であると心の奥底から考えているのだろう。
（やはり王っていうのはどこかおかしいいんじゃないのか？）
いきなりそんな話をきいたランサーのマスター、画仙がそう思うのは仕方のないことだろう。
「そこまで自らを誇っておるのであれば、まずは名乗ればどうだ？　自らの誇りたる真名を名乗ることをはばかるようでは貴殿の格も知れよう」
キャスターの言葉を聞き、アーチャーは怒気をその身に纏わせる。殺意が倉庫街に放たれる。
「我が拝謁の栄に浴してなおこの面貌を知らぬと？　そのような雑種を生かしておく価値は、ない!!」
アーチャーが言う。瞬間アーチャーの上方、対をなすかのように黄金の揺らぎが生じる。そこから出現したのは圧倒的な魔力を纏いし物品。すなわち宝具。きらびやかな矛と矢。
その瞬間（とき）、画仙の強化された聴力はひとつの声を捕らえた。
「はは、ははは」
それに気付いたのは画仙ただ一人。倉庫の中からのかすれた笑い声は得体のしれないマスターの一人のものだ。

「殺せ……！」
倉庫の声。その時に現れたのは黒く重厚な甲冑を全身に纏ったサーヴァントだった。
武骨なフルフェイスの兜はその顔を多い隠している。
「征服王。おぬし、あやつには声をかけんのか」
「そうはいってもなあ。あれは交渉なんぞできそうにないわなあ」
黒いサーヴァントから放たれているのは殺気。アーチャーのように理由がある殺気ではない、ただ前に敵がいるから殺気を巻き散らしているのみ。その圧倒的な殺気こそ黒いサーヴァントがバーサーカーであることを暗に示している。
(ステータスが見えない？ そういった宝具があるのか？)
画仙は冷静にバーサーカーを分析していた。
聖杯戦争のマスターの対サーヴァント用ステータス透過能力でステータスが見えないとなれば、自らのサーヴァントを迂闊に向かわせることができない。
さらにバーサーカーのマスターが誰を標的にしたのかという問題もある。敵は『殺せ』といった以上確実に誰かを敗退させる気でバーサーカーを現界させたのだろう。
画仙たちはサーヴァントのマスターであり魔術師であるとはいえ、人間である。彼らを殺すことなどサーヴァントともなれば容易にできる。
(強化を重ね掛けすれば２・３回は防げるだろうが。いかんせん能力がわからないこと

には手を打てない。最悪の場合は令呪だが、ランサーが納得しないかもしれないからな。……どうするか）

「この我を仰ぎ見ることを誰が許した？ 雑種風情が……」

画仙がそこまで思考した所でアーチャーの冷やかな言葉が怒気とともにバーサーカーにむけられた。

どうやら、このサーヴァントは自分の姿を見られるだけでも屈辱と受け取るらしい。

「せめてその散りざまにて我を興じさせよ、雑種」

アーチャーの後ろ黄金の揺らぎより宝具が放たれる。

サーヴァントにとって切り札といえる宝具を高速とはいえ無造作に投擲する。その場にいた全員にとって、アーチャーの行いは飛び切りの愚行に思えた。

とはいえ、射手（アーチャー）が物を射出したということ、射出したのが宝具であるということ。それだけでその一撃は必殺の威力を持つことを意味していた。宝具が高速で飛来したことにより路面は引きはがされ、砕けたコンクリートをまき散らす。それをまともに喰らえばいかにサーヴァントともいえどひとたまりもないだろう。……喰らえば、だが。

その粉塵がはれた時、バーサーカーは無傷でそこにいた。手中にはアーチャーが撃ち出した矛が握られている。

（射出された矛を掴み取って、それで矢を迎撃したのか。理性を失ってここまでの技量

とは……。やばいな）
流石にこれには他のサーヴァントでも驚きを禁じ得ないらしい。アイリスフィールにウェイバーは何が起こったのかわからないようだったが、視覚や反応速度を強化していた画仙や元々人間を凌駕しているサーヴァントたちはなにが起こったのかを把握していた。
ライダーとセイバーは感心したような表情を。ランサーはうれしさのこもった表情を。キャスターは『そんなことに興味ない』と言わんばかりに開いた書物を読み始める。
アーチャーは表情を憤怒一色に染め、殺意をまき散らす。
「その汚れた手で我が宝物に触れるとは、そこまで死に急ぐか！狗ッッ!!」
アーチャーの周りで再び黄金の揺らぎが浮かび、そこから再び宝具が覗く。その数はざっと十六といったところか。
「その手癖の悪さを持ってどこまでしのぎ切れるか見せてみよ、雑種ッ!!」
アーチャーの号令を受け次々と宝具が放たれる。だがそれはバーサーカーの体どころか鎧すら傷つけることができない。飛来した宝具を先程の矛で払い、またあるものは掴み取って地面に突き刺し、またあるものは軌道を僅かに逸らすだけですり抜け、より強い宝具を掴み取り打ち返す。
最後の宝具を弾き飛ばしその勢いのまま手にしていた宝具二つを投げつける。それ

は回転しつつアーチャーののっていた街灯を切り裂く。
とはいえ、アーチャーは宝具が街灯に触れる前にそこから飛び降りていた。そのままアスファルトの地面に降り立つ。
「痴れ者が。天に仰ぎ見るべきこの我を同じ大地に……」
アーチャーが着地し、バーサーカーを憤怒に顔をゆがませ睨みつけた瞬間。バーサーカーの投擲した宝具がアーチャーに回転しつつ飛来する。
その宝具は黄金のハルバードだった。アーチャーはぎりぎりで剣を取出し飛来したハルバードを弾くも、弾く角度が悪かったのか斜め後方、アーチャーの甲冑を掠りコンテナを貫く。
「我の言を無視し我が宝物に傷をつけるとは、その不敬、万死に値する!!」
再びその周囲に浮かぶ宝具軍。その数は４０を超え、その全てがバーサーカーに矛先を向けている。あれだけの力をみせたバーサーカーもこれだけの数を一度に受ければひとたまりもないだろう。それどころか周囲のサーヴァントも巻き込まれかねない。
ライダーは戦車(チャリオット)の手綱をつかむ。セイバーはアイリスフィールを守るように不可視の剣を構える。ランサーは長槍を構えアーチャーを見据える。
その緊張に張りつめた空気は作り出した本人によって、すなわちアーチャーによって破られた。

「貴様ごときの諫言で我の怒りをおさめろと？　大きく出たな時臣……」
　アーチャーが宝具軍を消す。
　あれだけの怒気をあっさりとおさめたアーチャー。アーチャーのマスターが令呪を使ったのだろうか。そうでもなければこの傲岸不遜なサーヴァントが怒りをおさめることはなかっただろう。
「雑種ども。せいぜい有象無象を間引いておけ。我と矛を交えるのは真の英雄だけでよい」
　アーチャーが黄金の光となって消える。霊体化して離脱したのだろう。
　アーチャーを標的としていたバーサーカーはその殺意をほかのサーヴァントに向けることにしたらしい。アスファルトの地面を高速で駆け抜け、街灯を引き抜いたバーサーカーはセイバーにとびかかる。
「A――urrrrrrrrrrrrr!!」
「くっ!?」
　振り下ろされた街灯はセイバーの不可視の剣に受け止められる。その受け止められたということが問題だった。
　バーサーカーが振り下ろしたのはただの街灯のはず、なぜおそらく宝具であろうセイバーの剣と打ち合えるのか。

「なるほど、奴の手にした物はなんであれ奴の宝具になるのか」

見ると、その街灯には黒い魔力が纏わりつきその身を保護していた。それはほかの宝具のような莫大な魔力を黒く染められた街灯は持っていた。

その奇怪な宝具による苛烈な攻撃にさらされたセイバーは防戦一方に追い込まれている。

そこに飛び込んだのはランサー。ランサーはその長槍を、大上段から振り下ろされたバーサーカーの街灯に叩きつけ弾く。

少しバーサーカーは後退するも、再び接近してランサーに対し街灯を横なぎに振りぬこうとする。その攻撃の向かう先を見抜いたランサーはそこに長槍の穂先を合わせるようにして、固定する。

空中で完全に停止して運動エネルギーを０にされた長槍の穂先に、宝具化した街灯が激突し……街灯は真っ二つに切断される。その長槍の宝具としての効果が発揮されたのは一目瞭然であった。

一瞬の隙を見逃すことなくランサーは長槍の石突きをバーサーカーの腹を守る部位の甲冑に叩き込む。

なにかが砕けるような音とともにバーサーカーが吹き飛ばされる。ランサーの膂力による打撃をまともに喰らったバーサーカーは地に這いつくばっていた。

　直後、バーサーカーは黒い霧のように消える。霊体化してその場を離脱したのだろう。
「ランサー……」
「すまぬが、剣士の英霊よ。儂の目的のためには奴を逃がすほかなかったのだ。……我が主もそれで構わぬか？」
「構わない。奴の宝具がわかっただけでも僥倖だ」
　バーサーカーの宝具は厄介だというのは、ここにいた全員が理解していた。持った者を宝具にするという宝具を持つバーサーカーはある意味で、アーチャーよりも危険といえるだろう。
　事前に退散したアーチャーも宝具の多さという面ではかなり強力なサーヴァントだろう。
「ここは一度引くぞ、ランサー」
「承知した。……ッ!?」
「ッ!?」
　ランサーは音に、セイバーは直感に従いその場を飛び退く。するとそこに雨が降り注いだ。
　黄と赤に光る雨が地面を抉り、倉庫街をさらに破壊しつくす。

「今のを避けるとは。やはり私の見立ては正しかったようだな」
「キャスター、貴様か!?」
　セイバーがキャスターを睨みつける。キャスターの持っている書物が光を纏ってい
た。それはキャスターが魔術攻撃を行ったことに他ならない。
　対魔力Ａのセイバーが回避行動をとった。そのことがその魔術の尋常ではない威力
を暗に物語っていた。
「驚いた。坊主!·魔術師ってのはあんなことまでできるのか」
「分からない、あんな魔術見たことがない」
　キャスタークラスが行使する魔術や魔法は、現存する魔術師には不可能だと言われて
いる。ウェイバーがその魔術を知らないのは無理もない。
　キャスターは言う。
「しかし、これはいささか分が悪い。ランサーとセイバーが同時に襲ってくるとなれば
一魔術師に過ぎない私では勝ち目はあるまい」
『撤退しろキャスター!』
　どこからかキャスターのマスター、ケイネスの声が響く。
　ランサーもセイバーもすでにキャスターに向け自らの得物を構えていた。
「仕方があるまい」

そう言ってキャスターは何かを呟く。虚空に魔法陣が浮かび上がりそこに充填されていた魔力が炸裂する。
それは魔力による爆弾だった。奔放する魔力は粉塵をまき散らしマスターやサーヴァントたちの視界を奪う。

「逃したか」
粉塵が消えた時、そこにランサーとキャスター、そしてランサーのマスターの姿はなかった。
「いやはや、あの二人ますます余の配下に迎えたくなったぞ」
「ライダー、貴様は一体何のために出てきたのだ?」
「そんなもの貴様らに誘いをかけるために決まっておろう」
屈託のない笑みとともにライダーは答える。
「とか言って結局、総スカンじゃないか!!真名までばらしてどうすんのさ!!」
「そう言うでない、坊主。案外何とかなるものだぞ」
そういって、ウェイバーの背を叩く。ライダーは加減したのだろうが、ウェイバーの

矮躯には強すぎたのだろう。ウェイバーは顔面から戦車(チャリオット)の御者台に叩きつけられる。
「騎士王、貴様はこれより余に挑む気はあるか？その気があるなら是非もないが……」
「今夜、私は魔力を消費しすぎている。万全の貴様と戦うのは下策だ」
「ならば、貴様と余との戦いは万全の状態で行うとしようではないか。おい、坊主、貴様は何か気の利いた台詞でも言えんのか？」
ライダーがウェイバーを見ると、御者台のうえでうつぶせに倒れ気を失っていた。どうやら打ち所が悪かったらしい。
「もうちょっとしゃっきりせんかなあ」
空気が和んだ。どうやらこのライダー場を和ませることにも長けているらしい。
「さらばだ、騎士王。次に見舞えるときには存分に余の血を熱くしてもらおう」
2頭の牡牛に鞭打って征服王は飛び去った。
「ありがとう、セイバー。あなたのおかげで生き残れた」
「私がここまで戦えたのは貴女が背中を守ってくれたからです。アイリスフィール」
戦場となった倉庫街はもはや見る影もない。アスファルトは剥がれ落ち、コンテナが砕け、地に穴が開き焦げ付く
「どのサーヴァントも強敵でした。誰一人、弱者は存在しなかった」
「これが、聖杯戦争なのね……」

情報整理

冬木市ハイアットホテルの３階。部屋に帰り着いた画仙壊善はすぐさま荷物をまとめ始める。

ここには数日前から宿泊しているため、それなりの情報網を持つ者であれば、この場所がばれてもおかしくない。

大量の武器をまとめながら先程の戦闘について思考をめぐらせる。

セイバーのマスターはあのアイリスフィールとかいうホムンクルスか暗殺者の男のどちらかだろう。あの舞弥とかいう女はマスターではないことはほぼ確実だ。

セイバーの正体は本人の言葉を信じるならかの騎士王とのことだが、実はそれもこちらを騙すための嘘である可能性は否めない。しかしその言葉が真実ならおそらく宝具が剣を隠すだけというのはないだろう。もう一つの宝具、それもランクＡ＋以上の可能性もある。通常の戦闘ではランサーに分があるようだが、隠している宝具の力がわからない以上一撃で負ける可能性もあるので油断はできない。

ライダーの戦車（チャリオット）はかなりの威力を持っているのだと思われる。無防備に登場したように見えるが、なにせ三大騎士クラスの英霊二騎が戦っている中に登場したのだ。相当

あの宝具に自信があるのか、またはそれを超える宝具を持っているのか。
ともにいたマスターの実力は不明。警戒はしておくべきだ。
アーチャーの真名は不明。とはいえ、あれだけ大量の宝具をばらまくあの戦法。生前に多数の逸話を生んだ英霊ではなく収集したと考えるのが妥当だろう。今回、アーチャーが使用するのを確認できた宝具は４０以上。そんな多くの逸話を生むなど1度や2度の人生では足りないだろう。
マスターは御三家のひとつ、遠坂家の人間で間違いないだろう。
バーサーカーはとにかく危険度が高い。とはいえ触れたものを宝具にする、というなら生前の逸話も想像はつく。おそらく決まった武器を持っていた英霊ではないのか、戦場で奪い取った武器を使って戦ったかだろう。
そのマスターはおそらくあの蟲を使役していた奴だろう。
キャスターに関してはヒントが少なすぎる。魔術師として知られる王で調べていけば真名も分かるだろう。
そのマスターの情報も少ない。現状での考察は困難だ。
画仙が思考の海から意識を浮上させるとシャワールームから誰かが出てきたことに気付く。
「おお、我が主。拠点を移す支度は整ったのか？」

「ああ、終わったが。ランサー？何をやってるんだ？」

「この時代の行水の手段はよいものだ。なにせすぐさま体を清められる」

ランサーはシャワーを浴びてきたらしい。サーヴァントが現代のことに興味を抱くのはいいことなのか悪いことなのか。

「支度が整っていないようだが？」

ランサーはテーブルの上にあるステアーＡＵＧを見て言う。その周辺には実験器具が並んでいる。

「ああ、この作業を終えたらここを出る」

画仙はいくつかの薬品を調合し、それをトレイに注ぎそれにステアーＡＵＧを漬ける。

「おぬし、なにをしておる」

「ああ、画仙工房が裏で動いて輸入した武器と同じ種類の武器だったからな。うちが他のところに武器を売る場合は、不良品回収用にこの薬品とのみ反応する蛍光塗料を塗っておくんだが……やはりな」

ステアーＡＵＧの安全装置の部分に光るモノがある。それは小さい刀のマーク。そのマークは画仙工房のかかわった武器であることを示していた。

「これで、奴らの装備を幾分か把握できたわけだ」

　それとともに売った武器を思いだしながら画仙は言う。
「ほう、敵の策を想定するのは重要だからのう」
「とはいえ、こちらが画仙工房であることはばれてしまったからな」
　舞弥を拘束した際に使用したナイフには画仙の名を刻んでいた。とはいえ、画仙の魔術を知る者はそう多くない。こちらの名前がばれたところで宣伝程度にしかならないのだが。
「さて、拠点を移すぞ」
「承知」
　ランサーに霊体化させ、自分の身体に強化を施した画仙は窓から跳躍し夜の闇に消えていった。

「キャスター、あれほどの魔術が使えるのであれば、耐魔力の低いライダーやバーサー

カーは仕留められたのではないか？」
「無茶を言う。キャスターたる私が正面から戦って、戦士である奴らにかなうわけなかろう」
　冬木市ハイアットホテルの一室にキャスター陣営はいた。
「代わりと言ってはなんだが、敵サーヴァントを一人仕留めておいてやったぞ」
「なに？」
「あの場を見ていたサーヴァントがいたからな。まあ、あのサーヴァントは仕留めても安心はできないが」
「サーヴァントは全て出揃っていたはずであろう？８騎目のサーヴァントとでも言うつもりか？」
　セイバー、ランサー、アーチャー、ライダー、バーサーカー、そしてキャスター。先日、脱落したアサシンを除き全てのサーヴァントがあの倉庫街に集結していた。聖杯戦争の性質上７騎のサーヴァント以外には呼び出される英霊などあり得ない。
「８騎目ではない。そのサーヴァントはアサシンだった」
「馬鹿な！アサシンは昨日脱落したはずだ！」
「いたんだから、仕方がないだろう。それに隠れてばかりで攻撃をしていない貴殿にも問題はある」

「そうよ。ケイネス」
　そこに割り込んできたのはケイネスの婚約者ソラウだった。
「使い魔を通して見ていたけれど、あなたはこそこそ隠れているばかりで何もしていないじゃない」
「し、しかし聖杯戦争はまだ序盤なんだ。初戦のうちは慎重にいくべきだ」
「あらそう？でもあのセイバーのマスターは倒せたのではなくて？」
　キャスターに魔力を供給しているのはソラウである。それにより、ケイネスはサーヴァントに供給する魔力を気にすることなく魔術を行使できる。ソラウはケイネスが負うべきことを自分が肩代わりしているのにも関わらず、ケイネスが自分の役割をまっとうしていないことについて責めているのだ。
「そのようなことを言うのであれば、貴殿もほとんど何もしておらぬではないか」
「なんですって？あなたが現界しているのは私が魔力を供給しているからなのよ？」
「それは、ほかのマスターが行っていることと同じことだろう？それにあの場ではランサーが戦っているにも関わらずそのマスターは暴れていたではないか」
　倉庫街に行くためにこのホテルを出る前にキャスターは使い魔を放っていた。それからの報告により自分の着く前に行われていたことをキャスターは把握している。
　ランサーのマスターが何を行ったか。コンテナの中に隠れていた男。銃を持ってい

た男女。
離れたところにいたライダーは見つけていなかったが。そこにいたすべての人物の顔は把握していたのである。
「ソラウよ。貴殿はケイネスとは違い安全なところにいたのだ。魔力を多少消費しようと大した問題にはなるまい」
「それは……」
「いい加減にしろ。キャスター！ソラウは何も悪くないであろうが!!」
ケイネスが怒声をもってソラウをかばう。それを聞き、自らのマスター二人に背を向ける。
「ケイネスよ。その怒りを忘れるな。そうそう。貴殿らがもう少しでも考えれば、私を使う方法も見いだせるやもしれぬ。せいぜい頭を使うといい」
そう言ってキャスターは霊体化し姿を消した。

冬木市ハイアットホテルの屋上。

そこには美しいファンファーレが鳴り響いており。一人の男が青白い馬に乗った男、そして赤装束の男と対峙していた。

「よりにもよって貴様か!!なぜわしを呼び出した!!くだらぬ理由であれば焼き尽くしてやろうぞ!!」

「そう言うな。ほかならぬ私が頼むのだ」

「うぐゲホッ!」

屋上に立っているのはキャスター。いつもの指輪を左手につけ馬上の男の目を見据える。

馬上にいる男は王冠を被り豪奢な服を着ており、時折口から火を吐いているように見える。

最後に赤甲冑の兵士風の男。体はぼろぼろでありながらその装束には傷一つないのはいかなる理由があるのか。

「この王に対しその口ぶり。貴様は変わらぬな!腹立たしい!じつに腹立たしいぞ!!」

「私も変わった。伝説として歴史に名を刻んだ王も今や使い魔に成り下がっている」

それを聞いた馬上の男は唖然とした後笑い出す。
「ハハハハハ!!貴様が使い魔だと!貴様は何時であれ我々を統べる王であっただろうが!!」
「その、貴様が、何の用で我々を、ガハッ!呼び出し、たのだ」
吐血しながら言う赤装束の男。
「そうだな。本題に映るとしよう。そこらの霊脈から取り出したマナを利用しているせいか、召喚を維持できなくなってしまう。簡潔に言おう。貴殿らの力を貸してもらいたいのだ」
「貴様ぁ!下らぬことに王たるわしを呼び出したのであれば首を落としてやろうぞ!!」
「話は、聴いて、やろう、ゲホッ!ゲホッ!!」
「貴殿らには……」

冬木市ハイアットホテルが放火され、宿泊客には直ちに避難するように勧告されてい

た。
そんなホテルをを見ている無表情の男。くたびれたコートを着た冴えない日本人といった容姿の男が放火の犯人だと疑う者は誰もいなかった。
その男の名は衛宮切嗣。魔術師を狩ることを得意とする『魔術師殺し』である。彼はこのホテルを拠点としているマスター、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトを仕留めるためここに出向いたのだ。
(舞弥を拘束していたナイフの名『画仙』。まさかこんなところで戦うことになるとはな……。っと余計なことを考えている場合じゃない)
彼はおもむろに取り出した携帯電話に番号を入力する。
それは冬木ハイアットホテルに事前に仕掛けた爆弾の起爆のための鍵(キー)であった。
最小限の爆発はホテルの構造上、必要不可欠な支柱を破壊する。
冬木ハイアットホテルはいとも簡単にあっけなく倒壊した。

狂戦士

キャスターが出現する。場所は廃工場。彼の前にはそのマスターであるケイネスがいた。
敵が出たわけではない。キャスター陣営の宿泊していたホテルが何者かの手によって爆破され、仕方なく拠点を移したのだ。
それによりケイネスは持っていた礼装のほとんどを失った。彼の礼装『月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）』によりケイネスとソラウの命は助かったのは不幸中の幸いだろう。
「キャスター!!貴様、どこでほっつき歩いていた!?」
「どこでもいいだろう?悪いが、貴殿に行動を強制されるつもりはない」
「ッ!?……もういい。だが、キャスター。貴様の陣地作成スキルでここに工房を作成しておけ」
「私が作るのは神殿というのが正解なのだが……そのようなものは貴殿が作ればよいのではないか?私はこれでも忙しいのだ」
「気絶したソラウが心配だ」
爆発の時にソラウがなぜか失神してしまったのである。

ソラウはこれまで聖杯戦争のような戦場に出たことはなかった。だが、彼女も魔術師。たかが爆発程度で気絶するほどやわではないはずなのだが。

「ふむ、たしかに供給される魔力量が少ないな。止むをえまい」

と言うとケイネスがソラウのもとに向かおうとする前にキャスターは廃工場を改造し始める。

腕を横に振るとどこからか道具が現れる。それは祭壇のような外見あり、まつられるかのように巨大な宝石が置かれていた。それと同じ物をいくつか設置し、それを前にして呪を紡ぐ。

「キャスター。それはなんなのだ?」

「……ケイネス、貴殿はソラウの様子を見るのではなかったか?」

「いいから、答えよ」

「これは我々の時代の魔力炉だ。魔力を生み出すのでも、魔力を吸い上げて蓄える物でもなく、ただ魔力をため込んでおき供給する物……現代では宝石魔術というやつだ」

宝石が光り、キャスターとの魔力パスがつながる。

「宝石魔術というのならそれにいつ魔力をこめたのだ?」

「これは私が生前作ったものだ」

「なに!?」

「これが私の宝具の一つ。とはいえ、これはただの固有結界に過ぎないのだが。私の切り札は貴殿も知っているだろう?」

固有結界と呼ばれるそれは心象風景を具現化する現代魔術の到達点。それすら、切り札でもないというこの英霊はキャスターとして召喚できる英霊の中でもかなりの上位の英霊なのか。

「貴殿は早くソラウのもとに向かうがいい」

「あ、ああ」

呆然としていたケイネスにキャスターは行動を促す。

ケイネスがいなくなったのを確認し、キャスターは儀式を始めた。

ソラウが目覚めたのはキャスターが工房(神殿)を作り始めて1時間後だった。

「ソラウ!」

「……んっ?ケ、ケイネス?私はいったい」

ソラウはケイネスを見て問う。その顔には戸惑いの色があった。

「前の工房が爆破され今まで気を失っていたのだ。すまない君を守りきれなかった私の失態だ」

「ま、待ってケイネス。工房が爆破?ならどうして私は……」
「月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）で守ったが、どこかで体を打ったのかも知れない」
　それを聞いてソラウは僅かに顔を赤くした。
「そう、貴方が助けてくれたのね、ケイネス」
（いままでのソラウはこのような反応をしなかったはずだが、気のせいか）
　ケイネスはそう考えたが、愛している人にそう言われてうれしくないはずがなかった。
　それを見ていたのはキャスターと梟頭の狼蛇の尾をもつ怪物だった。梟頭の口が開く。
「コレデヨイノカ?」
「よい。ご苦労であった。貴殿は帰るといい」
　梟頭がキャスターは一人ほくそ笑む。
「これならば宝を消費した甲斐もあったというものだ」
　迫りくるは夜の闇。また、聖杯戦争の時間が訪れる。

ランサー陣営は画仙の運転で自動車に乗っていた。安物の白い軽トラックである。
「ランサー、頼んだものは明日の昼には届くらしい」
「ほう、それは楽しみだ」
それなりの霊脈の場所に立つ古びた旅館に拠点を移した彼らは、テレビのニュースで冬木市ハイアットホテルが爆破されたことを知った。
やはり拠点がばれていたのだろう。
その後、画仙工房の息のかかった店に連絡してから、遠くの有料駐車場に止めていた自分の軽トラックを取りに行った。
今はその帰りである。
街灯の照らす道を軽トラックは行く。夜の冬木は戦場だ。魔術師たちがこぞって動き出し、サーヴァントが戦い始める時間。彼らはいつ敵が来るのか、常に警戒をしてい

た。
　ある公園の横を通り過ぎようとした直前、ランサーが画仙に対し言う。
「主。この先にサーヴァントがいる」
「サーヴァントは任せた」
「承知」
　軽トラックを止め、降りる。
　画船が辺りを見回した時、ランサーに向けて上空から何者かがふってきた。
　ランサーは襲撃者の得物をその長槍を振るうことで弾く。
　襲撃者は漆黒の霧で覆われた甲冑を纏いし英霊。狂戦士（バーサーカー）。
　バーサーカーの得物は、やはりというべきか尋常な武器ではなかった。公園からとってきたのであろうベンチと街灯である。それを量の手で掴み、双剣のごとく操る。
「ツ！・悪い、ランサー。俺は逃げる！・バーサーカーのマスターとは相性が悪い」
「そうするといい」
「『わが脚は駆ける馬のごとく』。任せたぞ!!」
　足に強化を施し全力で駆ける。画仙の全力なら安物の軽トラックより速いのだ。
　それを追うように大量の蟲が公園から飛びだしてきた。
　画仙は知る由もないが、その蟲は牛骨すら噛み砕く『翅刃虫』。捕まればひとたまりも

ない。
　さながら黒い霧のように画仙に迫る蟲。幸い周囲に人はいない。魔術の秘匿に追われる心配はないだろう。
　魔術刻印の自動詠唱機能により画仙の体の耐久力が上昇する。
（距離を詰められてる。このままじゃジリ貧だが……）
　やけに黒スーツの下に隠したホルスターより拳銃を抜き取る。
（視覚強化、判断速度強化）
　魔術刻印を通して魔術を発動する。足を止めずに振り向き撃つ。
　弾丸は蟲の群れに吸い込まれ、体液をまき散らす。
（なるほど、弾丸が撃ちぬいたのは1匹だけ。思っていたより堅いな。……って、車!?）
　いきなり前方から自動車が走ってきたのである。画仙は気づけば都市部に近づいていた。
　全力の跳躍を持って車を飛び越える。車は急ブレーキをかけスリップするが気にしている暇はない。
（最悪の手段は令呪だが……流石にここでランサーとの関係を悪化させるのは拙い。となると……）
　走りながら周囲を見渡す。道路の両端に停車した自動車がいくつか、大量の街灯、前

方に信号機。

『火は燃えさかり、天を焼き尽くす大火となれ』

呪を紡ぐ。それと同時、魔術刻印を経由し腕力を強化する。地面を滑りながら停止しつつ振り向き、拳銃を連続で発砲。

そしてその銃弾のあたった物に向けて全身全霊を込めて、持っていた手榴弾の内いくつかを自動車に開けた穴へ向けて全力で投擲した。

そして、自動車は蟲の群れを巻き込んで爆発した。

（……完全に賭けだったがうまくいったらしいな）

蟲の群れは一団となって突撃してきた。ならば、爆発にまとめて巻き込めるのではないか。という考えからの苦肉の策である。

すり抜けざまに自動車に対し、火力をあげるための強化を施しておいたのだ。正確には『よく燃える』性質を持つガソリンを燃えやすく火力が強まるように強化したのだ。

強化魔術は存在を高める魔術。強化のエキスパートである画仙にとっては片手間でできることだった。

（ランサーは大丈夫なのか？）

画仙は至近距離で起こった爆発に皮膚が焼けるような感覚を覚えた。

人通りは限りなく少ないとはいえ町中で車を爆破したのだ。すぐに野次馬が集まる

だろう。そう思い逃走しようとし、
　蟲に左腕を噛まれた。
「――――ッッッ!?」
　それは先程爆破したはずの蟲。『翅刃虫』。画仙は右腕で腰のナイフを抜き蟲に突き刺す。黄の体液をまき散らし蟲は絶命する。
『わが耳はすべてを聞き取る兎の耳なり』
　すぐさま聴力強化で周囲を探る。幸い、生き残っていた蟲はこの一匹だけだったらしい。
（……油断した。二の腕のあたりの骨が折れた、か。耐久強化してなかったら左腕は持ってかれてたな）
　死してなお左腕、二の腕のあたりに噛みついている蟲。肉を切り裂き、骨を砕くまでの力。
（主人の下を離れるのが他の蟲よりも遅かったのか、単純に飛ぶのが遅い個体だったのか。いや、この予想に意味なんてないし、分かることもない、か）
　ひとつ分かることがあるならば、左腕の使えなくなり足手まといとなったマスターは、自らのサーヴァントのもとに向かうことはできなくなった、ということであった。

ランサーは防戦一方だった。

右のベンチに左の街灯による、宝具の猛攻。狂化してなお冴えわたる武芸の腕。

ランサーはバーサーカーの力量は、先日戦ったセイバーより上だと認識していた。

ランサーの宝具である長槍を使えば、バーサーカーの宝具を破壊することもできる。

しかし、この状況はランサーに宝具を使わせない。

ランサーの宝具たる長槍の効果を発動する時、わずかに隙ができる。

バーサーカーの片方の宝具を切り落とした隙にもう一方の宝具で攻撃してくるだろう。

「■■■■■■■■■■■ーーー!!!」

一撃一撃を弾きつつ思考を巡らせる。

（このまま戦っておれば負けることはなかろうが、勝つこともできん。気は進まんがあれを使うか……）

少し力をこめてバーサーカーの宝具化したベンチを弾く。その時、ランサーはかすか

な違和感を覚えた。
(なるほどのう。ならば、策を変えるとしよう)
ランサーは長槍を振るう。先程までとは違う速度。筋力ランクAをこえるランサーの全力をもって振るわれた長槍はバーサーカーの持つ宝具の一つ、ベンチを破壊した。
バーサーカーのもっていたベンチは宝具化しているとはいえもともと公園においてあったベンチである。
宝具としての力を使うまでもなく名槍であるランサーの長槍。公園のベンチを使った急ごしらえの宝具。
その二つが打ち合った時、どちらに軍配が上がるのかなど問うまでもない。
バーサーカーのもっていた宝具は二つ。ベンチを破壊しても街灯がある。横なぎに振るわれる街灯。
だが、ランサーは宝具としての力を発揮して切ったのではない。故にランサーに宝具を破壊した後の隙はほとんどなかった。振るわれた街灯を難なく弾き、距離をとる。
(あの宝具。破壊できるとわかったのなら攻めるのはたやすい)
ランサーが再び槍を構える。
が、バーサーカーは黒い霧のように霊体化して消えた。
(逃したか……。主、画仙を追った蟲が気がかりではあるが、こうして儂に魔力が流れて

おる以上無事であろう）

ランサーは霊体化し画仙の下に向かおうとして、少し考え引き返してきた。

ランサーは乗り捨てた軽トラックの中で実体化し、持ち前の騎乗スキルにて運転。画仙のもとに向かった。

夢

　これから戦が起こるその地でその男は槍を携え立っていた。
（儂も老いた。ここが儂の生涯で最後に駆ける戦場となるだろう）
　戦場こそ自分の力を最も発揮できる場所。彼はこの戦以降、主に対しできることはないと理解していた。
（だがそれでもかまうまい。儂は我が主より与えられた使命を全うするのみ）
　兵を率い駆け、敵兵を切り捨て、敵将を討ち、ただ勝利するのみ。
　向かってくる兵は彼にとっては敵ではない。その槍の一振りで目の前の敵を叩き潰す。
　太平の世。天下統一。自らの主が日の本を治める時代。
　それを目指した彼の戦いの終焉の地。その地の名を関ヶ原と言った。

　正午。画仙改善は目覚めとともに一言。

「夢？」

　サーヴァントを召喚したマスターは自らのサーヴァントの記憶を夢として見ることがあるという。それが画仙の身にも起きたのだろう。

（あれがランサーの記憶……最期の戦い）

　画仙はそこらの魔術師以上に実戦経験はあると自負している。死徒を狩ったり海外の戦場に放り出されたりもした。が、夢の景色。ランサーの記憶の中の戦争は兵がひしめき合う、まさに乱戦状態。生前のランサーがそんな中で得た戦歴はまさに規格外だろう。

（我ながら頼もしい英霊を引き当てたもんだ。が、それに比べて俺は）

　昨夜の戦いにて傷を負った画仙。傷は左腕を骨折のみ。ただの蟲程度に追いつめられるとは不覚としか言いようがない。

　とりあえず応急処置をして宿に戻ってきたのである。

　戻ってきてから、すぐに寝たため魔術的な治療はまだ行っていないのだ。
「おお、目覚めたか」
「悪いな、見張りなんてやらせて」
「うむ、おぬしが死ねば儂も消えるのだ。何が起こるかわからぬ以上、見張り程度はせねばなるまい」
「悪いが引き続き頼んだ」
「承知」
　霊体化してランサーが出ていく。それを確認した画仙は、右拳を振り上げ、左腕に振り下ろした。
「ッ!!」
　激痛とともに左腕の骨がさらに砕ける。それに治癒魔術を施す。
　画仙壊善の魔術属性は火・地・水の三重属性。その起源は『破壊』『再生』『改善』である。
　その起源により自ら『破壊』したものを『再生』することで、破壊前よりも良い状態に『改善』することに対して特化しているのである。
（これで明日には復帰できるだろう……明日のからが本番だ）
「おい、主よ」

「どうした」
「客人だ」
「……来たか」

その男は壺を抱え湖の前に立っていた。
「すまない」
『貴様ノ考エハ、分カッテイル。コウ見エテモ我ラハ貴様ヲ気ニ入ッテイルノダ』
男の横にいる、人間とカエルと猫の頭を持つ蜘蛛は言った。その蜘蛛は魔法陣の上に

乗っていた

「だが私は貴殿らを……」

「良イ。貴様ノ行イハ正シイダロウ。少ナクトモ貴様ラ人間ニトッテハナ」

言葉を失った。蜘蛛は続ける。

「奴ラトテ、貴様ニ封印サレルノデアレバ、納得デキヨウ」

「……貴殿はどうなんだ？」

「我モ、貴様ニ封ジラレルナラバ受ケ入レヨウゾ。……トハイエコノ封印ハ後ニ解ケルコトニナルデアロウ」

男は、もっていた壺に右腕の指輪を押しつけつつ蓋を開ける。それを見た、蜘蛛は言う。

「……モウ別レノ時カ」

「もう話すこともない。さらばだ」

「サラバ」

蜘蛛は壺に吸い込まれた。後に残るのは静寂。

男はそれに蓋をして厳重に封印を施し、湖に沈めた。

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは首をかしげた。

「何故この私がこんなところに？」

「どうしたの？ケイネス」

「いや、なんでもないよ。ソラウ」

キャスターに半ば無理やり外に連れて行かれたケイネスとソラウはアーケードにいた。

「キャスター。貴様、どういうつもりだ」

ケイネスは多少の怒りを浮かべ自らのサーヴァントに問いかける。

ケイネスは優秀な魔術師である。幼少時より当たり前のように才能を発揮し、時計塔でもあらゆる分野の魔術で成功をおさめた天才。神の祝福でも受けているのかの如く

才能をケイネス自信は当たり前の事と思っていた。
　だからこそケイネスは自分にとって想定外の事態に対して弱い。その上、敵に対する感情はコントロールできても、身内に向ける感情はコントロールできないという弱点があった。
　が、多少の怒気を纏うのみでキャスターに話しかける、などという聖杯戦争前の彼にはあり得ないことが起きている。ケイネスはその変化に気付いていない。
「どういうつもりも何も、あそこに引きこもっていても何もすることがないだろう」
「それはどういうことだ?少なくともほかのサーヴァントの対策程度は……」
「ほかのサーヴァントは全て私が倒してやろう。貴殿はほかのマスターの相手を想定しておくといい」
　だったらマスター戦の準備をすべきではないか、ということを考えるケイネス。
「今の貴殿の礼装は『月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）』以外にないのだろう?ならばあそこに引きこもっていても無駄だ」
　返す言葉もなかった。
　確かにケイネスは礼装のほとんどを失い、残っているのは彼の切り札『月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）』と何体化の使い魔。その使い魔も外にはなっており、報告を待つのみ。……あんな廃工場では研究もできない。

「仕方あるまい」
「それに貴殿はもっと世の中を見た方がいい。私はそのあたりにいるのでな」
キャスターは歩いて行ってしまった。ケイネスもソラウとともに歩き出す。
しかし、活気のある町だと、ケイネスは思う。先日爆破されたホテルの部屋から見下ろしたこの町はどこの国の物ともしれない粉飾がひしめき合い情緒のかけらもない、醜悪な街だとだと思ったものだが、
（こうして自らの目で見ることで分かることもあるということか。そういえば、研究ばかりで外の世界を見て回ったことなどそう多くはなかったな）
とにかく見て回ることにしたケイネスとソラウだったが、一つ困ったことがあった。
（そういえば、私はソラウとデートの一つもしたこともないではないか!?）
（えーと。こういう時はどこに行けばいいのかしら）
「と、とりあえず、ソラウ。そこの書店にでも入ってみるとしよう」
「そ、そうね。ケイネス」
ケイネス達が入った書店はなかなか巨大である、ケイネスとしては洋書コーナーで他のサーヴァントの正体について調べられる可能性も考慮してこの選択だった。
すぐに洋書コーナーにたどり着いた。眺めると品ぞろえはなかなか良い。
冬木市は外来の住民が多いため、こういったコーナーが充実するのは必然なのだろ

う。

その証拠にこのコーナーにはもうすでに小柄な男がいた。

その男に並んで本を選び始める。まずは自らのサーヴァント、キャスターの生涯について。今朝見た夢はキャスターの過去であるとするならばそれについての記述のある本もあるはずだ。いつも翻弄され続けているあのキャスターを御するには奴の人となりを知らねばならないとの考えからだった。

立ち読みなどという低俗な行為を自分が行うのは気が咎めたが、あのキャスターのこと、戻ってくるまで時間もかかるだろう。

ソラウも本を選びだす。視線は恋愛的なジャンルを行き来している気がするが気のせいだとケイネスは思った。

ケイネスは選んだ本を開くとその内容に没頭した。

ライダーのマスター、ウェイバー・ベルベットは天才である。
　正確には彼自身がそう思っているだけで、周囲からの評価はあくまでただの凡俗とし
か思われていないが。
　事実、彼の家は魔術師としての歴史が浅く、魔術回路も大したものではない。しかし、
それでもウェイバーは魔術の総本山たる時計塔へ入れたのは自分の才能だと信じて疑
わなかったし、魔術師の血筋の差など努力で覆せると思っていた。
　しかし、彼の才能は認められることはなかった。
　その才能を見とめさせるために時計塔での自分の講師であるケイネスの取り寄せた
聖遺物を盗み、この極東の地まで聖杯戦争に参加したのだ。
　だが、召喚したサーヴァント、ライダーはウェイバーの言うことを聞きもせずにふる
まっている。
　この三日間でウェイバーのプライドはほとんど折れてしまった。自分のサーヴァン
トを御することすらできないマスターである自分を情けなくも思った。……ケイネスも
同じように自分のサーヴァントを御しきれていないことを知り、そういうものなのかと

思ったりもしたが。
彼が繁華街のアーケードまで出向いてきたのはあることを調べるためだった。
それは彼自身のサーヴァント、ライダー『征服王イスカンダル』について。
夢で見たイスカンダルの記憶。それが彼にはどうしても気になったのだ。
無論、ライダーに見られれば死ぬほど恥ずかしいため金を渡して自由にさせた。流石にアーケードから出ることは（かなり頑張って）やめさせたが。
そして、洋書コーナーで拍子抜けするほど簡単にその本は見つり、その本に没頭していたわけだが……。
ふと気づくと横に人の気配がする。それに気づいてつい興味本位でその人物を横目で確認してしまった。
「!?」
ウェイバーは驚きすぎて顎が外れるかと思った。
（な、なななんで、ケイネスがここに!?）
「おうい、坊主!どこだ!!」
しかも、最悪のタイミングでライダーが帰ってきてしまった。
（まずい、このままじゃケイネスにばれる!?）
きっとケイネスと顔を合わせたら、ねちねちと小言を言われるに違いない。流石に魔

術師の原則である神秘の秘匿のため戦闘にはならないだろうが、それでもあの陰湿な小言は胃が痛くなるのだ。

　ケイネスはおそらく本屋で騒いでいる人物（ライダー）の大声で集中を乱され憤怒のオーラが周囲に漏れていた。その横に立っている女性もほぼ同じである。

　ついに通販で買ったTシャツを着てと巨大ズボンをはいたライダーが現れてしまった。

「おお、坊主!そうちびっこいと本棚の間にいたら全く見えんなあ」

「普通の人間は本棚より小さいんだ!!……あ」

「ウェイバー・ベルベット。貴様なぜこんなところにいる……?」

「ケイネス、そんなことはどうでも良かろう」

　ライダーに続いて現れたのはキャスター。いつものローブ姿ではなく、地味目な服に身を包んでいる。

「キャスター。貴様なぜ服が変わっている?」

「あの服装のままでは目立つだろう?安心しろ貴殿の財布から金は抜き取っておいた」

　ケイネスを横目にウェイバーは言う。

「なんでお前、キャスターといるんだよ……」

「いやあ、そこで偶然あったのでなあ」

「だからって、なんで自分のマスターのとこに他のサーヴァント連れてくるんだよ!!」
ウェイバーには自分のサーヴァントが何を考えているのかもわからない。
他のサーヴァントと自らのマスターを合わせるなど、マスターを危険にさらしているだけではないか。
「安心しろ。ライダーのマスターよ。いくら私であっても魔術の秘匿くらいは心得ている。それにこのようなところで戦闘を行うのは気も進まない」
「と、キャスターもこういっておる。心配はいらぬだろう。そんなことよりもこれだこれ。なんとアドミラブル大戦略Ⅳは本日発売であったのだ!」
自慢げにゲームパッケージを見せるライダーを心底あきれたように見るウェイバー。ケイネスも同じような表情を浮かべている。それを横目で確認したウェイバーは途端に恥ずかしくなる。
「も、もう帰るぞ、ライダー!」
「少し待て坊主」
ライダーに呼び止められ、今度はいかなる痴態をさらす気なのかとその顔を見たウェイバーは、ライダーがいつになく真剣な表情をしていることに気付いた。
「キャスターよ」
「どうしたのだ、ライダー」

「此度の聖杯戦争、余とお主を含め４人もの王が参戦しておる。ここはひとつ我ら王どうし酒杯を交えて王の器を図って見ようと思うのだ。先程会ったアーチャーは承諾した。貴様はどうする」
「……いいだろう。だが、ライダー、貴殿はセイバーにどう誘いをかけるつもりだ?」
「それが問題でなあ。セイバーをどうするか……」
「セイバーの陣営は海沿いにある潰れた民宿らしき場所を拠点にしている」
すらすらと言うキャスターに驚いたような表情を浮かべるライダー。驚いたのはウェイバーやケイネスも同様だ。
なぜこのサーヴァントは自分の情報を惜しげもなく公開したのか?
「キャスター、そのような情報どこからとってきておるのだ?」
「私の使い魔が優秀なだけだ。集合はそのあたりでいいだろう」
「ああ。キャスターよ後で会おう。行くぞ坊主」
「え……ああ」
そう言って書店の外に向かうウェイバーとライダー。
後ろで何やらケイネス達が話していたが気にすることはない、振り向くことなく歩き続け外の世界に出た。
(ケイネスにねちねち言われなくてよかった)

そんな安堵感を覚えたウェイバーと上機嫌のライダーは自らを付けている存在に気付くことはない。

聖杯問答

『魔術師殺し』衛宮切嗣は此度の聖杯戦争においていくつもの拠点を用意していた。海沿いに立つ潰れた民宿もその一つである。

海沿いにぽつんと立つその家には切嗣の手回しによって電気も通してあり暖房器具や食料も置いてある。魔術工房の設置には都合のいい地下室もあったため、そこを拠点とすることになった切嗣の妻にしてアインツベルンのホムンクルスであるアイリスフィールにとっては都合のいい環境ではあった。

アイリスフィールがそこで魔力の高い者の接近を知らせる警報結界の設置を行ったのが昨日。

「マスターはまたここに留まれと？」

「ええ。残念だけど……」

結果として昨日は戦闘を一度も行っていない。というのも切嗣に言われたからなのだが。

切嗣いわく『あっちが勝手に潰しあってくれるなら潰し合わせておけばいい』とのことだったが、結果セイバーからの不満を買ってしまっていた。戦争においては当然の策

なのだが、騎士であり尋常な勝負を望んでいるセイバーは隠れて漁夫の利を狙うというのが許せないのだろう。
無論、セイバーも切嗣に意見を発しないわけではなかった。しかし、セイバーは切嗣にまったく相手にされていないのだ。
それどころか切嗣は召喚されてから一度もセイバーに口を開いていない。
その理由として『魔術師殺し』たる衛宮切嗣は英雄が嫌いであることが一つの原因だろう。
いつであっても戦場を地獄として見てきた切嗣は、戦場で名をはせた英雄を、戦闘を肯定するような逸話を持つ英雄を、なかでも戦いを尊いものであるとする騎士が嫌いだったのだ。
故に騎士の王たるセイバーとは決して分かり合える存在ではないと認識しているのである。
その切嗣はこの家に現在いない。おそらく助手の舞弥とともに情報収集を行っているのだろう。よってここにいるのはセイバーとアイリスフィールだけである。
「セイバー、そんな顔をしない。お食事にしましょうか」
「食事……作れるのですか? 昨日はマイヤの持ってきたコンビニベントウとか言うのを食べてましたが」

「冷凍食品っていうものがあって簡単に作れるらしいの。さっき舞弥さんに教えてもらったから大丈夫……たぶん」
　さっき舞弥が来たのはそれが理由か、とセイバーは考える。
　そんな中、結界が反応した。外から聞こえるのは雷鳴。
「セイバー。この魔力、それにこの音……」
「おそらく、ライダーでしょう」
　魔力で甲冑を造りだし纏った騎士王は外に飛び出す。アイリスフィールはその後に続く。
「おう、騎士王！ってなんだその武骨な戦支度は？今日は当代風の服は着ておらんのか」
　民宿の少し前。すなわち道のど真ん中に停めた戦車（チャリオット）の上のライダーはTシャツにジーンズという服装だった。
「ってライダー!!とりあえずこれを消すかどかすかどっちかにしろ!!」
「なぜだ坊主」
「こんなものを止めてんのを一般人に見られたら大変だろうが!!」
「ライダー。貴様はいったい何をしに来た？」
　セイバーの疑問に対しライダーは戦車（チャリオット）の御者台においてあった大きな酒樽を肩にかつぎながら言う。

「見て解らんか？王として一献交わしに来たにきまっているであろう。ほれ。このように酒も持ってきたのだ。場所は……あのあたりなど良いのではないか？」

勝手に話を進めていくライダーがそう言って指差したのは港である。戦車（チャリオット）を消し、港に向け歩いていく。その姿をウェイバーが追いかける。

「アイリスフィール。どうしましょう？」

「……あの男本当に酒盛りをしたいだけなのかしら？」

セイバーは険しい表情で言う。

「できることなら、向かいたいのですが」

「え？どうしてなの、セイバー？」

「私も王、相手も王。それを弁えた者が酒を酌み交わすのならそれは剣に依らぬ戦い。王として他の王の挑戦には応えるのが相手に対しての礼儀だからです」

それを聞いたアイリスフィールは少し考え、頷く。

「わかったわ。行きましょう」

港に胡坐をかいて座すライダーと酒樽を間に挟んで座るセイバー。ライダーの後ろにはウェイバーが、セイバーの後ろにはアイリスフィールが座って、成り行きを見守っている。

ライダーはその拳を振り下ろし眼前の樽の蓋を叩き割る。そして、後ろのウェイバーからあるもの受け取る。

「これがこの国における酒器であるそうだ」

自慢げに見せたのは竹の柄杓。

ライダーはその柄杓で樽の中の酒を掬って一気に飲み干す。

「聞いたところによるとこの聖杯戦争は、聖杯を得るにふさわしき器の持ち主を選別、見定めるために行われるのだそうだ。だが、聖杯を得る者を選別することができる手段が闘争だけであるわけではあるまい。まずは酒を交えて互いの英霊としての格を互いに見定めるだけでもその答えは自ずと出る」

そう言ってライダーは柄杓を差し出す。それを受け取ったセイバーは樽から酒を掬い、飲み干した。

「それで、まずは私と格を競おうというのか？ライダー……いや、征服王」

「然り。お互いに王を名乗っておるのだ。これは言うなれば『聖杯問答』。騎士王と征服王のどちらが聖杯を得るべき格を持つ王か？ 酒杯に問うことではっきりするであろう」

そこでセイバーから柄杓を受け取りつつ、思い付いたようにライダーは一言。

「そういえば我らのほかにも二人ほど王と言い張る輩がおったな」

「戯れはそこまでにしておけ、雑種」

黄金の光が集まり、人の形を作り上げる。現れたのは先日圧倒的な力を見せつけたサーヴァント、アーチャー。

「アーチャー、なぜここに」

「街の方でこいつの姿を見かけてな。誘うだけ誘ってきたのだ。あともう一人誘ってきたのだが……」

「もう到着している」

いきなり現れたその姿にライダー、アーチャー以外の全員が驚愕の表情を浮かべる。無理もない。酒樽の前にいつの間にかキャスターが座っていたのだから。ライダーはむしろ興味深そうに、アーチャーはそれを半目でみるだけである。

「貴様ら随分と遅かったではないか。余と違って徒歩なのだから無理もないが」

「よもやこのような場所を『王の宴』に選ぶとは。我（オレ）に対してのこの無礼、どう詫びる？」

「そういうでない。ほれ、駆けつけ一杯」

　ライダーは酒を汲んだ柄杓をアーチャーに渡す。
　あっさりとそれを受け取ったアーチャーは躊躇う様子もなく酒を飲み干す。が、その顔をしかめた。
「なんだこの安酒は？　こんなもので王の格が図れるとでも思っていたか？」
　アーチャーは柄杓を返しつつ言う。ライダーはそれで再び酒を掬う。
「そうかぁ？　こいつはこの土地の市場で仕入れたうちじゃなかなかの一品であったのだが。ほれ、貴様も」
　そう言いながら、キャスターに柄杓を渡す。
「そう思うのなら我（オレ）が本当の酒というものを教えてやる」
　アーチャーが右手をかざすと黄金の揺らぎが生じる。
　それを見たセイバーは以前操車場で見た攻撃を思いだし、腰をあげかける。が、すぐに座りなおした。
　剣を用いないことが王の宴における暗黙の了解。いくら傲岸不遜なアーチャーとはいえ、ここで戦闘を行うつもりはないだろう。という判断で行った行動だった。
　アーチャーが取り出したのは黄金の杯と。
「ほお」
「王の酒というものを思い知れ。雑種ども」

アーチャーが黄金の酒器をライダーへ投げ渡し、ライダーが酒をキャスターとセイバーに渡す。
渡された酒を４人は煽る。
「これはうまい！」
「!?」
「ふむ……これは神代の一品ではないか？」
驚愕する3人とそれを見て満足げに笑うアーチャー。
「どんなものでも我が宝物庫には至高の財しかありえない。これで王の格は決まったようなものだな」
「……」
その言葉に沈黙するセイバー。
その時キャスターがぶつぶつと何かを呟く。するとそれぞれの前には魔法陣が浮かび上がり、中から酒器一式が現れる。
「確かに貴殿の酒は至高の酒だ。これほどの酒はそうは見られまい」
「キャスター、これは？」
セイバーが問う。見れば酒器はウェイバーとアイリスフィールの前にも出現していた。

「これは、私の誇る神殿より取り寄せた酒だ。アーチャーよ。貴殿も自らの酒こそ至高と語るならこれを飲んでからにしてもらおうか」

三者三様の反応をしながら酒を煽る王三人。

「これは……！」

「……！」

「ほう……」

セイバーとライダーは驚き、アーチャーは苛立ちを興味に変えてキャスターを見る。

「アーチャー。貴殿の言葉通りなら、王の格を競うのは私と貴殿のみということになるのではないか？」

「調子に乗るなよキャスター。よもや、我の持つ酒があの程度の物だけだと思って言っているのではあるまいな」

「確かに貴様らの酒は至高の酒と呼ぶにふさわしい。だが、あいにく聖杯は酒器ではない。やはりこの場は各々の聖杯へ託す願いをもって、王の格を決めねばなるまいて」

アーチャーはライダーの言葉を鼻で笑う。

「そもそも、聖杯を奪い合うという時点で貴様らは理から外れておるのだ。あれは我の所有物だ」

「なに？」

「それならば貴様は聖杯がなんなのか知っているということか?」
「知らん。だが、この世の全ての宝物はその起源は全て我が宝物庫の中にある。故にあれは我の所有物だ。貴様ら雑種が我が宝物を奪うなど、盗人猛々しいにもほどがあるぞ」
アーチャーの言葉は確かな自信と共に放たれた。無論それで納得するようなサーヴァントたちではない。
「貴様の行っていることはただの世迷い事だ」
「いや、セイバー余はこの者の正体に心当たりがあるぞ。だがアーチャー。貴様の言葉通りなら貴様の許可さえあれば聖杯をとることができるということになるが?」
「無論だ。だが、我の治める民でもない雑種に与えるものなどない。今からでも我が配下に降るというなら考えてやらんでもないぞ?」
「そいつはできん相談だ」
「だろうな。言うなればこれは我の法だ。我が定めた我の法。貴様らが犯し我が裁く。問答の余地などどこにもあるまい」
「自らが定めた法を厳守してこそ王、か。一理ある」
それを聞いていたセイバーは疑問を呈する。
「ライダー、キャスター。貴様たちはアーチャーに聖杯の所有権があると認めたうえで

それを奪うというのか？」
「無論。余は征服王であるが故、他人の所有物を征服するのは道理だろう」
「この聖杯戦争はもう四度目だという。もはや、所有権の有無など関係あるまい」
「そこまでして何を望む」
　その問いを受けライダーは気恥ずかしげに眼をそらし、そして言う。
「受肉だ」
「「はあ？」」
「おい！おまえ世界征服するって言ってたじゃないか！ッのわ!?」
　ライダーが詰め寄ってきたウェイバーにデコピンを一発。ただのデコピンだというのに2メートル近く後ろに吹き飛んだのは英霊としてのパワー故か。
「杯などに世界をとらせてどうする。この身一つで世界と対峙することこそ征服の第一歩なのだ。だが今の余は身体一つにすら事欠いている。ならばまず受肉を願うのは当然のことではないか」
「ふむ。私と同じ願いではないか」
「なんだと？」
　キャスターの言葉に意外そうに問いかけるセイバー。
「理由こそ違うがな。私は新たな生を受けて別種の人生を歩んでみたいのだ」

「貴様は余のような野望はないと?」

「否。私は生前にできなかったことをしてみたいだけだ。国を治める王としての立場ではなく、王に従う兵士、自らの目的のために研究する魔術師、世界のためにあらゆるものを開発する技術者。こういったものを経験してみたいのだ」

「王としての誇りはないと?」

「それも否だ。私はあの国を治め繁栄させた。私以外の誰であっても私以上に繁栄はしなかっただろう。そういう自信がある。だが、私が王であれるのは治めていたのがあの国であったからだ。他の国を治めていれば間違いなくアレ程発展はしなかっただろう」

そこでキャスターは言葉を切る。その目はライダーもセイバーもアーチャーも見ていない。

「私という王が存在するはあの国だけだ。断じて他の国ではない。他の国の王となった時、私はかつての民や臣下たちを裏切ることになる」

「自らの行いに責任をもってこその王か。納得だ」

キャスターの話が終わり、必然的にまだ願いを語っていないセイバーに視線が集まる。

「最後は貴様だ。セイバー。貴様の願いを聞かせてもらおうか」

セイバーは無言で三人の王の顔を見る。

彼女の目には確かな決意があった。

「私は聖杯の力を持って故国の、ブリテンの滅びの運命を変える」

王と騎士

　空気が凍った。ライダーは理解できないものを見るようにセイバーをまじまじと見つめ、アーチャーは嘲笑し、キャスターは酒を煽り口を開いた。
「貴殿は今なんと言った？聞き間違いでなければ、運命を変えると聞こえたのだが」
「そうだ。聖杯が万能の願望器だというのなら、私のせいで滅んだ故国の救済は可能なはずだ」
「つまりセイバー。貴様は自らが過去に刻んだ歴史を否定するというのか？」
「そのとおりだ、尽くしてきた故国がなくなったのだ。それを悔やみ、変えたいと思うのは王として当然のことではないのか!?」
　その言葉をアーチャーは鼻で笑い、ライダーは答える。
「それは違う。そもそも王が国に尽くすのではない。民や国が王に尽くすのだ」
「それは暴君の治世ではないか！」
「然り。確かに我らは暴君。だがそれゆえに英霊だ。だが、セイバーよ。自らの治世の結末を悔やむ王がいるなら、それは貴様の言う暴君以下だ」
　ライダーに続き話し始めたのはキャスターだった。

「セイバー。貴殿は運命を変えることが救済だと本気で思っているのか？」
「思っている。ブリテンが滅んだのが私の責であるからこそ、あの結末を変えたいと願うのだ！」
「貴殿の故国が滅んだのが貴殿の責だと？　思い上がるな、セイバー」
「何だと？」
　セイバーにとって予想外の言葉であった。
「貴殿は、貴殿の力だけで国を治めていたと？」
「な……!?」
「そんなことはないはずだ。なぜなら国の歴史とは王によって作られるものではなく、国のすべての人間によって作られる物だからだ。食料を作る者がいて、国を守るものがいて、政治を行うものがいる。その中のどれか一つでも欠けては国として成り立たない。歴史として語り継がれることもない」
　キャスターは、そこで言葉を区切り、アーチャーの出した酒を飲む。
「故に、王と民衆によって築かれた国の歴史は、その国に住む全ての者の行いの歴史だ。それを否定することは、その国の全ての者の行いの否定だ。ましてや、それをたった一人の王の意志のみで変えるなど身勝手にもほどがある！」
　キャスターは声を荒げる。

ライダーは目を閉じ、アーチャーはキャスターが出した酒を飲む。
「セイバーよ。貴殿が、貴殿の国の民や配下であったという騎士たちの行い、そして貴殿自身の王としての行いを全て否定する覚悟があるか？ 自身の願いが先程言った暴君の行いと何ら変わりのないことを理解しているのか？」
「私は……」
「その覚悟がないというなら、聖杯はあきらめろ。それでも、願いを叶えるというなら、私は貴殿を王とは認めん。貴殿の願いは、身勝手な小娘の願いとなんら変わりない物に過ぎないのだからな」
キャスターはそこで口を閉ざす。
セイバーは考える。『自分の願いは身勝手な物だったではないか』と。
「キャスター。貴様、随分と饒舌ではないか」
「そうだな。酒が入ったからかも知れないが……？」
そこで、キャスターが顔をしかめる。
「……なるほど」
「キャスター、何があった？」
「すぐわかる」
その時、複数の影が現れる。

港をさまざまなところに現れる髑髏仮面。アサシン。
「な、なんで、アサシンがこんなに!?」
ウェイバーが悲鳴を上げる。
「なるほど、アサシンは自分の身体を増やせるか、分裂する宝具を所持しているわけか」
「おい、金ぴかこれは貴様の仕業か?」
「我が王の宴の席に浅ましき暗殺者などを連れてくるとでも?」
アサシンたちは口を開く。
「そう、我らは影」
「個にして軍のサーヴァント」
「貴様らの命、貰い受ける」
アサシンの宝具、妄想幻像(ザバーニーヤ)。生前の多重人格を利用し、自分の人格の数だけ身体を得て、個々の戦闘力と引き換えに複数で行動できるスキル。
敵を囲めばサーヴァントの守りすら通用しない、単純な物量でマスターを殺害しかねない凶悪な宝具である。
だが、征服王イスカンダルは酒の入った柄杓を手に立ち上がりアサシンに対し問う。
「貴様らも宴に参加する気はないか? この酒は貴様らの血と同じ、ともに一献躱そうではないか」

命を狙う暗殺者であろうと宴に引き入れるこの度量こそ、彼の王たる所以。
しかし、アサシンは短剣を投擲し柄杓を叩き落す。
「ほう、なるほど。余はこの酒は貴様らの血と同じといったが、貴様らがあえて自らの血を地面にぶちまけたいというなら、是非もない。セイバー、アーチャー、そしてキャスターよ。これはこの宴の最後の問いだ」
怒気をにじませながらライダーは問う。
「王とは孤高か否か？」
「王とは、人であることを望めない存在。孤高であるしか、ない！」
即答するセイバー。なにを馬鹿げたことをと呆れた顔をするアーチャー。
「否。王とは民と臣下の支えあってのモノ。孤高などありえん」
キャスターは一人別の回答を返す。
「ほう、わかっておるではないか、キャスター。だが、他の二人は全然わかっておらん。これは余が自ら王のあり方を見せねばなるまい」
暴風が吹き荒れ、世界が塗り替えられる。
現れたのは広大な砂漠。
「固有結界!?」
「魔術師でもないあなたが心象風景の具現化するなんて!?」

「無論、余に一人で固有結界を発動することなどできん。これを発動できるのは我々全員の心象だからよ」

　地を踏みしめる音が聞こえる。

　後ろから現れたのは百を超える軍勢。

　その一人一人が掛け値なしの英雄。

「こいつら一騎一騎がサーヴァントだ……」

　セイバーは息をのんだ。アーチャーが感心したように先頭に立つライダーを見た。キャスターは冷静に戦力を分析しつつ、内心でライダーを称えた。

「見よ！　我が無双の軍勢を！」

　ライダーは誇らしげに、自らの王道を誇示するように声をは張り上げる。

「その身は英霊と成り、崇められてなお余への忠誠を消えることはなく、再び余の召喚に応じた勇者たち。永遠の盟友たちとの絆こそ、我が王道その物!!　これが余の誇る最強法具『王の軍勢(アイオニオン・ヘタイロイ)』なり!!」

　かつて征服王イスカンダルとともに戦場を駆けた英霊たちの連続召喚。

　征服王の王道の象徴にして、最強ランクEXランク宝具の一つ。

　軍勢より進み出てきたのは黒い馬。

　伝説の名馬、ブケファラス。イスカンダル王の愛馬にして英霊の域まで昇華された、

イスカンダルの臣下。

懐かしそうにブケファラスを撫で。またがり、キュプリオトの剣を振り上げる。

「王とはッ！誰よりも諸人を魅せる者!!勇者の、民の羨望を集める道標として、先頭を歩む者こそが王！」

大砂漠に響き渡る声は王としての誇りと貫禄に満ち、勇者たちはその姿に魅せられる。

「故に王とは孤独にあらず!!その有り方こそ全ての臣下たちの意志を束ねた者であるが故に!!」

『然り！然り！然り!!』

征服王の言葉に臣下たちは声を合わせて応じる。

地を揺るがすほどの声が響く。

「さて、アサシンよ。あいにくだがここは平地、数で勝るこちらが有利だが？」

アサシンたちは一歩二歩と下がる。

「……これは駄目そうですね」

「残念っす」

「マスターめ……」

などと、諦めたように一部のアサシンが呟き、一か八かで武器を構える者もいた。

　そして、圧倒的な蹂躙が始まった。

　画仙の泊まっている宿は異様な雰囲気に包まれていた。
　キチキチと虫の鳴き声が響き、部屋の外からは悲鳴が聞こえている。
「主。この場は危険だ。逃げろ」
「まあ、たしかにこいつらと俺との相性は最悪だよ」
　おそらく、昨夜の襲撃者。狂戦士(バーサーカー)とそのマスターが再び攻めてきたのだろう。
　バーサーカーのマスターの魔術はそこまで強力な魔術というわけではない。しかし、強化魔術が基本である画仙の魔術は、対人戦を目的とするものであるが故、相性が悪い。最悪と言ってもいいだろう。
　しかし、画仙は笑う。
「だがな、その台詞はこっちの台詞だ。この虫どもとランサーの相性こそ最悪だろう？
　お前の切り札の宝具とは特にだ」
「むう……」
「ランサー、お前は対人なら間違いなく最強クラスのサーヴァントだ。だが、人外と戦闘

した逸話がないお前に、この場を任せることはできない」
　ランサーは口を閉ざす。それは画仙の言葉に対する無言での肯定だった。
「ランサーにはバーサーカーと闘ってもらう。まあ、俺も負けるつもりはない。なんのためにアレを送ってもらったと思ってる？」
「承知した。……儂が勝つまで死なぬようにな」
「もちろんだ。宝具を使っても構わないから絶対勝って帰ってこい」
　そして、ランサーは霊体化し部屋を出ていく。
　画仙は礼装を手に取る。
　それは一本の木刀だった。側面に彫られたいくつもの文字と記号が画仙の魔力を受け赤く輝く。
「さて、試し切りといこうか。今までの俺と同一視してくれるなよ、蟲ども」
　壁を貫き扉を砕きながら虫の群れが画仙に襲い掛かった。

　旅館の前で仁王立ちするランサー。
「狂戦士！いるのはわかっておるぞ。武士としておぬしに一騎打ちを申し込む！」
　その声に応えるように実体化する漆黒の騎士、狂戦士。纏っていた黒い霧は消失して

おり、バーサーカーの魔力によって生み出された即席宝具も携えていない。

「■■……■■■……」

うめき声をあげるバーサーカー。

バーサーカーがその身に纏う魔力は以前の物とは比べ物にならないことをランサーは見切る。

バーサーカーが持つ一本の剣。バーサーカーの魔力によって染まった漆黒の剣。

(あの強化はこの剣が原因か?　とすると、この剣が狂戦士の本来の宝具……)

槍を構える。

バーサーカーが剣を振り上げ迫る。

ランサーが長槍を振るい、バーサーカーの剣を受け止める。

バーサーカーは引いた剣をすぐさま振るいランサーの槍にぶつけ、ランサーはそれを受け流しつつ首を刎ねるべく長槍を振るう。

(昨夜より速い……!)

地面を蹴り一歩下がるバーサーカー。ランサーの長槍は空を切る。

「■■■■■■アアアアア!!」

避けた際に振り上げた剣を振り下ろす。ランサーは振り抜いた長槍の勢いを殺さず、中心を持ち回転させるように振る。長槍の柄の部分が剣の側面にぶつけられる。狙い

がそれ、剣はランサーの真横の地面に叩きつけられ、コンクリートにひびを入れる。
ランサーは長槍の柄の部分を掴んだ自身の右手を振り上げ、左手で掴んでいた槍の中心を軸に下から回転させる。
長槍の穂先が地面を抉り、バーサーカーを切断するべく迫る。
全力で後方に飛び退くバーサーカー。長槍の刃が甲冑の前方、顔面部分をかすめ、摩擦による火花が発生する。
ランサーが長槍を構えなおした瞬間、飛び退いた状態から切り返すようにバーサーカーはランサーに向かい駆ける。
ランサーはそれを迎え撃つように短く構えた長槍を突き出す。
バーサーカーはランサーに向け高速で剣を突き出す。
ランサーの長槍の刃がバーサーカーの心臓を貫き。
バーサーカーの剣がランサーの腹部を貫通した。

敗退

バーサーカーのマスター、間桐雁夜にあるのは痛みだけだった。
雁夜の魔力はさほど多くなく、祖父である間桐臓硯によって植え付けられた魔力を精製する刻印虫で、ようやく聖杯戦争に参加できるだけの魔力を得ている。しかし、体内に植え付けられた刻印虫は、魔力を精製するごとに雁夜の肉を喰らい、雁夜の命を着実に死に近づけている。

そもそもこうなったのは、ランサーとそのマスターの本拠地を偶然見つけだした雁夜がそこを襲撃することにしたからだ。
バーサーカーへの魔力を供給のほとんどを令呪を用いることでまかない、残りの自身の魔力のほとんどを自身の使役する蟲、『翅刃虫』に費やしての賭け。

本来の雁夜の目的を思えば愚策と言わざるをえない策。それをとってしまったのは彼の身体を食い荒らす刻印虫の痛みで、冷静な判断力が奪われていたからだ。
倉庫街での戦いでランサーはバーサーカーの邪魔をした。これからもランサーは自

分にとって邪魔になるかもしれないと思い、焦りすぎたのも一つだろう。
それほどまでに雁夜は追いつめられていた。
それでも彼は目的のために命を賭けて戦うしかない。
一人の少女を救うため、好きだった人に笑ってもらうため……何より、全て自分のために運命に身をゆだねるしかなかった。
そして、
「お前がバーサーカーのマスターだな」
運命は間桐雁夜を見放した。

旅館前。
ランサーはバーサーカーの心臓に突き刺さった長槍を引き抜き、バーサーカーがコンクリートの地面に膝をつく。
ランサーに刺さっていたはずのバーサーカーの剣が地面に転がる。その刃には一滴の血も付着していなかった。
「まさか……」
バーサーカーの甲冑からくぐもった声。致命傷によって消えかかって初めてバー

サーカーの狂化から解き放たれた彼の言葉だった。
「私が傷一つ負わせることもかなわないとは」
「光栄だとは思うが、この戦に余計な言葉は無粋というものだろう」
始めて言葉を交わした敵からの称賛。
「しかし、たがいに名乗りもあげず終えるのもまた無粋。おぬしの名を聞かせてもらいたい」
「……私の名はランスロット。アーサー王に仕えていた円卓の騎士……だった者だ」
自身を過去形で語ったバーサーカー、ランスロットの甲冑の中の目がゆっくりとランサーを見る。
「儂の名は……」

今まで苦しんでいたバーサーカーのマスターの様子が変わった。
令呪のある手の甲をぼんやりと見る。
「バー……サーカー……こいつを……」
令呪を使おうとしていることを察した画仙は、令呪のある腕を切断しようとする。
しかしバーサーカーのマスターを守るように蟲が飛びかかり後退する。

（こうなったらランサーを……）

「……殺せ」

バーサーカーのマスターは宣言する。

しかし、バーサーカーは現れない。もうすでにバーサーカーはランサーに倒されていたのだ。

バーサーカーのマスターの手が力なく地面に着く。

「……さく……らちゃん……。あお……いさん。……すまない」

ぼそぼそとしたつぶやきが聴力を強化している画仙の耳に届く。

黒こげになった蟲が画仙の周りに落ち、地面に触れた衝撃で粉々になる。

「死んだ……か」

名も知らぬバーサーカーのマスターに背を向ける。

手の甲の令呪を自分のものにすることもできたかもしれないが、画仙にはそういった方面の魔術には疎い。時間の無駄だろう。

ランサーと合流してこの場を離れ新たな拠点を造るために画仙は蟲の灰の舞う路地を歩く。

周囲は港に戻っていた。
ライダーの『王の軍勢（アイオニオン・ヘタイロイ）』の前にアサシンはなすすべなく全滅したのだ。
「征服王よ。あのまま貴殿の盟友たちを私たちに向けていれば、厄介な王たちを一掃できたのではないか？」
キャスターは笑いながら言う。
「確かにそれをすればいささか楽にもなっただろうが。余はこの場を酒の席だと決めていた。この場はあくまで酒によって王の器をはかるためにもうけたのだ。倒すのは無礼者だけでよかろう」
ライダーは持参した樽酒を柄杓で掬って言う。
「あれだけの配下を従えれば王と息巻くようにもなるか。面白い。貴様は我（オレ）自ら手を下す価値のある王だと認めてやろう」
アーチャーは自分の酒を黄金の酒器でのみ言う。
「そろそろ宴もたけなわと言うやつだろう。貴殿らも暗殺者が紛れ込んだ酒の席に長居はしたくあるまい」
キャスターも自分の出した酒を飲みほした。
「……」

セイバーは無言を貫く。
「聖杯問答という趣旨においての判決はあいまいだが。まあ騎士王……セイバー以外は私と互角と言うことにしておこう」
「何様だ。雑種。我は貴様のことはまだ認めてないぞ」
「まだということはこれから認められる可能性もあるということだな。英雄王」
「無論だな。この世の全ては我が裁く。貴様の価値もな」
「それは光栄なことだな」
そう言い残しキャスターは霊体化して消えた。

間桐雁夜の亡骸に近づく影が一つあった。
それは老人の姿をしていたが纏う雰囲気は老人のそれではない。
その老人の名は間桐臓硯。数百年の時を生きる妖怪のような男であり、冬木市の聖杯戦争の『始まりの御三家』のひとつ間桐家を支配する男である。
「まったく愚かよのう」
その顔に戦った息子を褒める様子は全くない。称賛とは真逆の嘲笑があるだけだ。
「だが、雁夜をやった魔術師め。魔術の秘匿も考えないような輩が聖杯戦争に参加する

とはのう」

魔術の秘匿。魔術の存在が公になるのを防ぐという、魔術師にとっては最も重視すべきことの一つである。

聖杯戦争においては本来であれば仲介役の聖堂教会が後始末をするのだが。

（この程度なら知られても問題ないのだが……まあ知られないことに越したことはあるまい。どうせやることもないのでな）

間桐臓硯は蟲を周囲に放つ。放した蟲は戦闘に巻き込まれた旅館の人達の遺体や虫の死骸を処理していく。

そして、間桐雁夜の遺体の処理に入ろうとした時、臓硯は気づいた。

間桐雁夜の遺体。その遺体の令呪のあったはずの右手が消失していることに。

「……なかなかに厄介な奴もおるようじゃな」

そう言って臓硯はニタリと笑う。

今回の聖杯戦争では臓硯はあくまで様子見に徹するつもりであった。

雁夜を出場させたのも、臓硯にとっては遊戯感覚であり期待などまるでしていない。

冬木の聖杯戦争は約６０年周期。今回の聖杯戦争に出場した雁夜は魔術師としての素養は最低といっても過言ではない。

だから次の聖杯戦争までに優秀な間桐の魔術師を用意する。そのために御三家のひ

とってある遠坂家から遠坂桜を養子として引き取ったのだ。
（桜の改造ももうすぐ終わる）
臓硯の目的は聖杯戦争の勝利し不老不死となること。そのためならどれだけ時間がかかろうと構わなかった。
（ご苦労だったな。雁夜。おぬしの悪あがきだけは評価してやるわい）
まあ、見世物としてじゃがな。と臓硯は呟き、雁夜に背を向ける。

「あらあら、随分と余裕ね」
背後から声。臓硯が振り返る前にその体が燃え盛った。
慌てて蟲で背後の敵へ攻撃しようとする。しかし、なぜか離れていたはずの蟲達まで燃えている。
「間桐のマスターを見張っていれば他の魔術師が来るって聞いてたけど本当だったのね」
声の主が女性であることだけはわかった。
「特別サービスであなたには真実を見せてあげるわ」
パチンッ、と指が鳴る音。
その瞬間、臓硯の脳裏にうかんだのはかつての自分。長く生きすぎて忘れていた過去

の理想が蘇ったのだ。
「せいぜい今の己を悔いて死になさい」
「……無、念……じゃ」
　その言葉を最後に間桐臓硯は焼失した

　臓硯が死んだことで、間桐邸の結界は全てが解除されていた。
「結界が消えたようだな」
　間桐邸の前に立っているのは弓矢を持ち緑色の服を着た男。
「なに？　その弓で壊せなかったのか、だと？　不可能ではないさ。だがそれには膨大な魔力がいる。それではマスターも困るだろう」
　その男は虚空に向け話しかけている。傍から見ると気が狂ったようにも見える。
　男は門を開き、扉を開け正面からゆっくり間桐邸へと入っていく。
「急いでくれだと？　随分と態度がでかいな。私には私のペースがある」
　男はどこかに話しかけながら間桐邸の廊下を歩いていく。
　しかし、一度廊下を曲がった所で足を止めた。廊下のど真ん中では酒瓶を持った酔っ払いが呆然と立ち尽くしている。

「なんだ、お前が助けたいという間桐桜とやらはこいつか？　ふむ、違う、か」

「ば、化け物……」

「……気が変わった。何？　助けてやってくれ？　馬鹿を言うな。お前との契約は間桐桜の命だけだ。他をどうしようと俺の勝手だ」

緑服の男は弓を構え矢を番える。酔っ払いは逃げようと逃げ出そうとしたのだろう、緑服の男に背を向けた瞬間に矢で射ぬかれた。

「私に向かってくるのであればまだ見込みもあったが、やはり凡俗だな。……お前の兄？　兄弟でここまで変わるものか？」

緑服の男は再び歩き始める。

男が酔っ払いの死体の横を通り過ぎた時。すでに死体は腐り始めていた。

「ここか」

彼が辿り着いたのはひとつの扉。間桐家では蟲蔵と呼ばれる場所である。

扉を開け中に入ると下へと続く大きな階段。

会談を降りきった場所から先には男の腰まで覆い尽くすほどの高さまで大量の蟲が蠢いていた。その中心には一人の少女らしきものが見える。。

緑服の男が少女に向かい歩きだすと男の前にいる蟲の群れがぞろぞろと男を避ける

ように左右に逃げていく。
「こいつで間違いはないな？」
「……おじさん。誰？」
　生気のない目で少女は……間桐桜は問いかける。
「残念だが名は名乗れない。あえて言うならば君のおじさんの友人とでもしておいてくれ」
「雁夜おじさんの？」
「そうだ。さて。ひとまず立ちたまえ」
　言われるがままに間桐桜は立ち上がる。
「さて、それではここを出るとしよう。……だがその前に」
　その瞬間、緑服の男が振り向きざまに放った一本の矢が間桐桜の左胸を貫いた。貫通した矢は後ろの地面に突き刺さり、桜は力なく倒れる。
「約束が違うだと？　別にお前との契約通りだ。傷口を見てみろ」
　間桐桜の左胸には傷一つもない。矢が貫いたにも関わらずだ。
「中にいた蟲を殺しただけだ。別に死んだわけではない」
　緑服の男は桜を肩に担いで言う。
「……あとは服だな。彼女の服はどこの部屋にあるか案内しろ。この屋敷を出るまでは

お前の意識は残しておいてやる」

四日目

　廃工場の一室。そこは廃工場とは思えないほどの装飾品であふれていた。それらのほとんどはキャスターが宝具で出したものである。おかげでケイネスとソラウは比較的快適にすごすことができていたといえる。
　時刻は午前2時。そんな中でケイネスは頭を抱えていた。
「これは……なんだ？　キャスター」
「なんだ？　とは？」
　ケイネスの目の前には気絶した一人の少女。そして何者かの右手。
「仕方がない。質問の順番を変えよう。キャスター。こんな時間までどこをほっつき歩いていたのだ？」
「昨夜もその言葉を聞いた気がするな。いや、別に奴らとの聖杯問答はかなり前に終わったのだ。だが、貴殿とソラウが楽しんでいるのを邪魔するのも悪いと思ってな」
「……見ていたのか？」
「うむ」
　ケイネスは少し黙るが気を取り直し、再び質問をする。　なお、ソラウはすでに眠り

についていた。

「ならば聞くが、この少女とそこの右手はなんだ？」

「そこの娘は、この地の聖杯戦争の始まりの御三家、間桐家の養子らしい。何やら間桐の魔術に体を慣らすために蟲を消しかけられる虐待を受けていたそうだ」

「魔術師としては対して珍しい事でもあるまい」

「まあ、そうなのだが……どうやらバーサーカーのマスター、間桐雁夜は彼女を救うためにこの聖杯戦争に参加していたらしい」

それを聞いたケイネスは嫌悪に近い表情を浮かべる。

「魔術師として生きていく幸福を捨てさせるというのが、私には信じられんな」

「まあ、そう言うな、ケイネス。それに一般人の魔術師の行いに対する認識はそういうものになることは自覚しておいたほうがいい」

間桐桜を一瞥しキャスターは続ける。

「それに名門とはいえ、間桐家は衰退しているのだろう？　少しそこの娘を調べたが、彼女の性質ならより魔術師として優秀な子を産ませるために使い捨てられるのが目に見えている。それはあまりに不憫だろう？　それに、そんなことは魔術師の幸福とは程遠いものだ」

「……だが、なぜこの少女を連れ帰ったのだ？　バーサーカーのマスターにつけられて

いたらどうするのだ？」

「ほう、そこまで気が回るようになったか」

「茶化すな。早く答えろ」

　ケイネスはそう吐き捨てる。

「その心配はない。バーサーカーのマスターは死んでバーサーカーも脱落を確認した。それとその少女を連れて帰ってきたのは私の意志ではない」

「なに？」

「どうやら私の指示で動かしていた部下がバーサーカーのマスター、間桐雁夜を気に入ったようでな。死んだ間桐雁夜の魂と勝手に契約してしまったのだ。部下曰く『決して勝ち目のない戦争に自分の身を犠牲に飛び込み、さらに戦禍を大きくするその精神こそ、私の最も愛するものだ』とか」

　キャスターはため息を一つつく。

　本来、キャスターが部下に指示していたのはバーサーカーのマスターの監視、ランサーのマスターの監視、そして戦闘が行われた場所にハイエナのように近寄ってきた魔術師の排除の三つであった。そして聖杯戦争のマスターが敗北した際の令呪強奪も同時に指示していた。

　だが、指示の言葉を減らしすぎた結果がこの事態を呼び起こしてしまったのである。

「これに関しては私のミスだ。すまないな、ケイネス」
「貴様が謝るなど珍しいこともあるものだな」
「その代わりというのもおかしな話だが、間桐の裏の支配者、間桐臓硯とやらは部下が仕留めた。とはいえ、油断はするな」
「なんだと?」
「どうやら、臓硯という男、体と魂を蟲に移していたらしい。魂は完全に焼き払ったらしいが、間桐邸の中のものまでは燃やせなかったようでな。残った蟲が支配者がいなくなったことで暴走する可能性もありうる」
「このケイネス・エルメロイが蟲ごときに後れを取るとでも?」
　そういうケイネスの顔に自信の色はない。彼にとっては魔術によって使役される蟲を殺すことなど造作もないことだからだ。
「油断するな、ケイネス。だが、臓硯の魂を植え付けられた蟲は確実に燃やした。仮に私がつけられていたとしてもこの場所を報告する対象はいるまい」
(臓硯の敗因は自分の拠点に魂を移した蟲、いわば本体を拠点におかなかったことだろう。いや、わざわざ自分の家のマスターの死を感知して自分の拠点を出てきてしまったことだろうか? しかし、なぜわざわざあんなところに出てきたのだ?)
　臓硯が自らの欲求を満たすために出てきたこと、そしてサーヴァントや強力な魔術師

が動いている中で逃げ場のない拠点に本体を置くことをよしとしなかったこと。この二つの理由を知らないキャスターは少し考察していた。しかし、そんなことをしても無駄だと判断し再び話し始める。
「もう一つの右手についてだが、それはバーサーカーのマスターのものだ」
「何？」
「令呪こそ消えているが、聖杯戦争の召喚システムを解析した貴殿ならばその右手から令呪を抜き出すことも可能なはずだ」
「令呪は貴様には効かんのだろう？」
「……それでも、私の魔力をブーストすることくらいはできる。私がが本気を出せばいくらソラウでも魔力が足りないからな」
　一瞬の間を不思議に思うケイネスだったが、ソラウの魔力が足りないという話を聞いて慌てる。言われてみれば基本的には夜に行われる聖杯戦争の中でソラウが早くも寝てしまったのは魔力の消費が原因なのではないだろうかと。
「まあ、とりあえず。そこの少女は私が引き取ろう。ケイネス。貴殿は令呪の解析を頼む」

『魔術師殺し』衛宮切嗣は冬木市の郊外にあるアインツベルンの城の中にいた。
目的は罠の設置。
冬木市の聖杯戦争の始まりの御三家のひとつ、アインツベルンに雇われた切嗣がアインツベルンの城を拠点とするのは至って自然な事である。そう推測し、この城を攻めてきたマスターを返り討ちにするため策。
そのために切嗣は魔術と近代兵器の融合によるトラップを城の中に大量に施したのだ。さらにご丁寧にアインツベルンの城の周囲の結界もそれなりの魔術師であれば簡単に破れるものにしてある。
隣には彼の助手の久宇舞弥。彼女もこのトラップの設置に協力させていた。
二人がかりでのトラップの設置には丸一日かかったが、夜中までかけてあらかた設置をし終えることができていた。
「切嗣。あの二人を置いてきてもよかったのですか?」
「構わない。アイリも最低限の自衛はできる。セイバーだって英霊相手ならそうそう負けることはないだろう。それに使い魔も何体かおいて監視している。」
二人は夜食として昼に買ってきたハンバーガーを食べていた。すっかり冷めていたが栄養さえ接種できれば二人にとっては問題のないことである。

（ライダーの宝具には驚いたが、特に問題はない。でも、アイリ達の新しい拠点を探さなくてはいけないな）
「そういえば……画仙という男。あれは何者ですか？　あの強さは只者ではなかった」
「僕も詳しい事は知らないが、武器の密輸の元締めのようなことをやっていると聞いた。おそらく僕たちの武器を日本に運んだのも元をたどれば奴だろう。こちらの武器はほとんど知られていると言ってもいいかもしれない。魔術師をしているとは聞いていたが、そこまで戦えるとは思ってなかった」
　何より舞弥の報告に会った戦いの中で形が変わる武器。そして、コンテナに軽々と突き刺さっていたナイフの切れ味。おそらくどの武器をとっても一級品だろう。
　そんなことを考えながら食べているとすっかり食べ終えてしまった。

　その時、魔術の警報が鳴る。
「ッ！　思ったより速かったな」
　舞弥はノートパソコンを操作し、城の外に設置していた監視カメラの映像を映し出す。
　結界の破られたところの周辺の映像を見るとすぐに侵入者を見つけ出すことができた。

その侵入者の姿を見て舞弥は眉をしかめる
「舞弥。侵入者は誰だ？」
「……言峰綺礼です」
それを聞いて切嗣は考える。
昨日、おそらく全滅したであろうアサシンのマスター、言峰綺礼。切嗣が聖杯戦争が始まる前に集めた情報で、最も危険だと睨んでいた男。
その男がわざわざここに来たのは、おそらく裏でつながりがある遠坂時臣の指示である可能性が高い。
「どうしますか？　今なら脱出もできますが」
「……いや。奴は元代行者。城の中のトラップだけで簡単に仕留められるとも限らない。それに奴は遠坂とつながりがある。このまま動かれても厄介だ」
令呪でセイバーを呼び出して戦わせれば、いくら元代行者で圧倒的な戦闘力を誇る言峰綺礼でもひとたまりもあるまい。
だが切嗣はそれをするつもりはない。セイバーは聖杯戦争を英霊同士の殺し合いと考えているため、言峰綺礼を攻撃させるのを断る可能性がある。そうなってしまえば、攻撃をさせるために令呪を使わざるを得ない。
そうなった場合は結果として令呪二つを犠牲にすることになる。それは切嗣たちに

とって大きな痛手だ。

「ここで奴を仕留める。作戦は……」

言峰綺礼がアインツベルンの城にやってきたのは遠坂時臣の指示ではなかった。むしろこの行動は遠坂時臣の意思に反すると言ってもいい。

（アサシンに調べさせていた情報が確かならここに衛宮切嗣がいるはずだ）

綺礼はアサシンを聖杯問答に特攻させる直前まで他のマスターの拠点の捜索に当たらせていた。特にこのアインツベルン城や、間桐邸といった『始まりの御三家』が所有する重要な拠点にはアサシンを張り込ませ監視をさせていたのだ。

その結果、綺礼は衛宮切嗣の居場所を把握することに成功した。

他にもランサー、バーサーカー、キャスターの陣営を把握することに成功していた綺礼は、アサシンを特攻させた後、そのことを遠坂時臣に伝え、一日待機することを命じられていた。

そんな中、綺礼がアインツベルン城まで来たのは『魔術師殺し』衛宮切嗣にその人生の答えを問うためであった。

綺礼にとってこれまでの人生は空虚な物だった。人の楽しむものを楽しいと感じたことはなく、人が美しいと思うものを美しく感じたこともない。自分がその空虚さを埋

めるためありとあらゆることを試してきたがどれも失敗していた。
そんな中、綺礼は聖杯戦争に参加することになり、戦争が始まる前の準備の時、切嗣の存在を知ることになる。
数年前、アインツベルンに雇われるまでの切嗣の人生が自分と似通っていると感じた。そして、アインツベルンに雇われて以降まったく活動しなくなってしまった切嗣のデータから、アインツベルンに雇われたことによって衛宮切嗣は空虚な人生の答えを得たと考えた。
すべては、己の空虚さを埋めるため。

鍵がかかっていた入り口の分厚い扉を壊して潜入した綺礼を出迎えたのは銃弾の雨だった。
言峰綺礼は両腕に持った黒鍵でそれを全て弾き、敵の姿を探る。
が、もうすでに敵は視界の中にはいない。
分かったのは2階からの攻撃だということ。
一歩一歩と、綺礼は前に歩いていく。銃声が収まり静かな城内にネズミの鳴き声が小さく響く。
切嗣がトラップを仕掛けている可能性もあるため、慎重に歩いていく。

足元に仕掛けられていた糸をまたぐように避け前に進む。
2階へ上がろうと階段に足をかけた。
その時、爆発が起き、階段が壊れる。
しかし、綺礼はそれを一瞬の判断で回避するために2階に向け跳躍。爆発に巻き込まれることなく2階に上ることに成功した。
次の攻撃は後方。
使い魔のネズミが糸を切った結果、後方にトラップとして仕掛けられていた二つのクレイモア地雷が作動し、周りに鉄球をばらまくとっさに振り返った綺礼は両手の黒鍵で鉄球をはじこうとする。
幸い、本来の攻撃目的範囲とは違う位置にいたために全ての鉄球をはじく綺礼。
その後方から発砲音。それを察知していた綺礼は振り返りざまに黒鍵で、弾丸を防御する。
その瞬間、綺礼の身体から力が失われた。

同盟

昼。
衛宮切嗣は久宇舞弥を連れて妻のアイリスフィール、そしてセイバーと合流を果たしていた。
場所は海の家。昨日、聖杯問答のあった港の前である。
「……同盟を組もうと思う」
食事をとりながらの他愛のない会話と状況の報告が終わった切嗣はそう切り出した。
「どういうことかしら？」
「セイバーの戦闘力のことも考慮すると現在の状況はあまりいいものじゃない」
「……切嗣。それは私の力が信用できないということですか？」
切嗣はセイバーを無視し、話しを続ける。
「言峰綺礼と交戦した時に最期まで出てこなかったところを見るとアサシンが脱落したのは間違いないだろうね。アサシンが完全に脱落したの僕たちにとっては都合がいい。僕と舞弥が裏で動きやすくなる。そのためにもアイリにはセイバーを連れて表向きな活動を増やしてもらわなくちゃいけない」

アサシンの存在は切嗣にとって厄介だった。先日、舞弥とランサーのマスターの交戦によって舞弥がアサシンに発見されている可能性は高まっていた。それゆえに舞弥に裏での破壊工作に当たらせることは困難だったのだ。

闇に紛れ攻撃してくるアサシン。そして、切嗣にとって厄介な相手であった言峰綺礼。この二つの脅威が同時に消えたことは暗殺者であり破壊工作を得意とする切嗣と舞弥にとってありがたいことだった。

「切嗣。セイバーだけではダメな理由はあるの？」

「確かにセイバーの戦闘力は高い。だが、敵も油断ならない相手が多いからね」

そう言うと、冬木市の地図を取り出す。

冬木全体を一つの紙にまとめた巨大な地図には他のマスターの拠点が記されていた。

全ての陣営の拠点をこの日までに切嗣と舞弥は発見していた。工作活動をとりづらくなった舞弥に、使い魔を使って敵マスターの場所を探らせていたのである。

「まずランサーだが、これは直接セイバーと闘っていたが、僕の見た限りでは互角。おそらく、セイバーの宝具を使うことさえできれば問題はないだろうね。今の所、まだ真名がわかっていないという問題はあるが、マスターが離れたあの場で宝具を使わなかったところを見ると一撃でセイバーを倒せるほどのものではないのだろう」

切嗣たちにとってランサーの拠点を割り出せたのは幸運だった。言峰綺礼との交戦

後に敵の拠点の捜索に当たらせていた舞弥の使い魔が移動中のランサーのマスターを発見していたのだ。
「バーサーカーも同じくだ。セイバーはバーサーカーの不意打ちによる攻撃を防ぎ切れていたからね。それに、さっき言っていたアイリの『違和感』が本当なら十中八九脱落したのはバーサーカーだろう」
アイリスフィールの違和感とは、体の中に何かの力が入ってきたような感覚だった。それはアサシンがライダーに蹂躙された直後と、今日に入ってすぐの夜中に発生していた。サーヴァントが脱落したことにより、アイリスフィールの中に存在する小聖杯の一部が満たされたのだろう。
その感覚はアイリスフィールの身体の自由をじわじわと蝕んでいたが、そのことをアイリスフィールは一切顔に出していない。特に切嗣には悟られまいとしていた。
「問題は残り三つ。アーチャー、キャスター、ライダーだ。まず、アーチャーはあれだけの宝具を所有している。近接戦ならまだしも、あれだけの宝具を乱射されたらセイバーも手も足もでない。それにセイバーの宝具を防げるだけの宝具を持っていたとしてもおかしくはない」
その言葉にセイバーは反論をしようとしたが、その言葉は自身で飲み込んだ。
以前見たアーチャーの背後に現れる大量の宝具が降り注ぐ圧倒的な光景を見たのも

あるが、ライダーの宝具『王の軍勢（アイオニオン・ヘタイロイ）』にまったくひるむ様子がなかったことを思いだしたからだ。
「キャスターは本来ならセイバーが優位なはずだが、セイバーはキャスターの攻撃を『直感』でよけたらしい。つまりキャスターの魔術はセイバーの耐魔力を貫けるということになる。真名も解っていないこの状況で、ぶつかるべきじゃない」
　さらに、魔術師には陣地作成のスキルがある。本来なら陣地作成のスキルによって陣地を作りそこにこもることで他のサーヴァントと互角に戦えるキャスターだが、多くの英霊が集まったあの場に堂々と現れたことからして、最低でもあの場の全員を敵に回して逃げ切ることができる自信があったのだろう。
　それほどのサーヴァントと正面から戦うのはあまりにも無謀といえるだろう。
「そして、ライダー。こいつは先日見せた宝具が問題だ。大量の英霊を全く同時に召喚する宝具。こいつを相手にすればセイバーの消耗は避けられないし、アイリを狙われる可能性もある。アイリ、君は召喚した英霊が宝具を持っていたようには見えなかったと言ったけど、それでも英霊としてのスキルは保有しているはずだ。少なくとも一体一体がアサシンよりも強いとみてもいいだろうね。それに、あの『戦車』による空中移動。奴らの拠点を探し出すのは骨が折れたよ」
　この陣営の他陣営に対する優位性はアイリスフィールの存在によってもたらされて

いると言っても過言ではない。聖杯の器であるアイリスフィールが陣営にいる限り、聖杯戦争の最後の戦場を選べるのはこの陣営であるからだ。
「厄介な敵に関してはわかったわ。でも、いったいどの陣営と同盟を組むつもりなの?」
「ああ、同盟を組むのは……」

山道を進むバイクが二台。
ランサー陣営の二人である。
目的は冬木市にある霊地の探索と敵の使い魔を振り切るためであった。
新たな拠点には画仙にできる最も強力な結界を張り、その内部にはとられても問題ないものだけを置いていた。
二人は山道の途中でよい霊地を発見しバイクを降りた。
「ふむ、現代の馬もよいものだな。しかし、このへるめっととやらは暑苦しくていかん」
「そう言うな。ただでさえ無免許運転なのに警察の厄介になりたくはない」
画仙は優れた強化魔術師だが、他の魔術はそこまで得意ではなかった。
あえて強化以外で得意な物を挙げるのであれば、自傷をすることによって起源を引き出しての治癒魔術である。

　事実、拠点に張った結界も魔力量に物を言わせた強引なつくりであり、一般的な魔術師であれば簡単に解除できる程度のものである。
　そして、そのことを画仙は自覚していた。それゆえに、他の陣営にとられていないできるだけ優秀な霊地を探す必要があったのだ。
「ここを少し歩けばいい霊地がありそうだ」
「主よ」
「なんだ？」
　歩みを止めず話し始める。
「おぬしはいったい何が目的なのだ？」
「そりゃあ、この聖杯戦争の目的は、勝って『神々の武器の設計図』を手に入れることだ」
「わざわざ、そんなことをせずともおぬしの本来の望み『究極に限りなく近づいた武具そのもの』を望めばよいのではないか？　それに、聖杯とやらが本当にすべての願いを叶えるというのなら、おぬしが存在しないと断じた『究極の武具』すら作れるのではないか？」
　ランサーの疑問に画仙は答える。
「勘違いしているようだから言っておくがな。ランサー。俺は『究極に限りなく近づいた武具』が欲しいわけじゃない。『究極に限りなく近づいた武具』をこの手で造りあげた

いんだ」
「ふむ？」
「お前は武士であって、戦う人間だからわからないかもしれないけどな。他の奴はどうか知らんが、俺は自分の作った物を人に使ってもらうために造っている。武器の輸入だって、最新の武器をチェックして俺の造る武器が究極に近づくための研究をするためについでにすぎない」
そうだな、と画仙は一言間をおいて何かを考え言う。
「例えばランサー。お前は強者と戦いたいらしいが、聖杯に『自分より強い者がいるかどうか』を訪ねて、『あなたより強い者はいません』とでもかえってきたとして、『今俺は誰よりも強いから、誰とも戦う必要はない』なんて言うつもりはないだろう」
「当たり前だな。勝負は時の運。実際に戦わねば意味はあるまい」
「同じなんだよ。例えば、聖杯に『究極の武具を造る力』を望んだとして、実際に俺がその力を得たとしよう。その力で『究極の武具』を造ってもそれは俺の力で造った物だと言えると思うか？　否、だ。そんなものは俺の力じゃない聖杯の力だ」
画仙はいったん言葉を切る。
「じゃあ、『究極の武具そのもの』を望んだとしよう。聖杯は確かに俺に『究極の武具』をくれるだろうさ。だがそれじゃ俺は『究極の武具』を持っているだけの存在だ。それど

ころか『究極の武具』を造りだしたのは聖杯ということになる。そんなん本末転倒だろ？」
「なるほどな。おぬしの望みはよくわかった。しかし、そうなるとおぬしはこの聖杯戦争を終えてもしばらくは望みはかなわんことになる」
「仕方ないことだ。俺が望んだことだからな」
「となると少しうらやましい気もするのう。儂の願いは強者との闘いだが、この聖杯戦争に出ているのは世界にいる一部の強者だけだ」
「それも仕方のない事だろう」
　そこで、ランサーは何かを思いついたような顔を、まるですさまじい策を思いついた軍師のような表情になって言う。
「ならば儂の望みはこの世に再び生を生きることになるだろうな」
「……どうしてそうなったんだ？」
「何やらこの時代には吸血鬼だの魔術師だのとまだまだ強者がいるようではないか。強者との闘いとは言ってもたった7人の頂点に立った程度では満足できん」
「人間はちょっとやそっと願いがかなった程度じゃ欲が出る生き物だとは言うが……」
「……む？　主よ」
　ランサーの空気が変わったのを画仙は見逃さなかった。

「敵か？」
「ああ。この先の霊地とやらだろうなサーヴァントの気配がある」
「……先を越されたか？」
画仙にとって良い霊地の確保はこの聖杯戦争において文字通り死活問題。先を越されたとあっては非常に困る。
「度のサーヴァントかわかるか？」
「わからん。だが、魔術師でない儂でも気づくほど接近したのだ。敵もこっちに気づいていると見ていい。だが、仕掛けてこないところを見ると、そいつは体調が思わしくないか、少なくとも仕掛けてこれない事情があると見える」
「ふむ」
画仙は考えるランサーが言うように体調が良くないのであれば、おそらくマスターの魔力不足だろう。事実、結界なども感知できない。
すなわち、ここの霊地を奪うには絶好のチャンスと言える。
「仕掛けるか？」
「……いや、やめよう」
大規模かつ強力な攻撃がなく近接戦を得意とするランサーは魔力の効率が良いという長所がある。しかし、昨夜の戦闘によって画仙の魔力は相当な量を消費していた。

「他のサーヴァントと交戦するには魔力を消費しすぎている。何より、お前の推測が正しければあっちも消耗してるわけだからな」
「ここの霊地をとるという面で見れば、それは好機ではないか？」
「確かにそうだ。だが、消耗した強者と闘ってお前の気が済むのか？」
「……ふん。わかっているではないか。おぬしの気遣いに感謝するぞ」
　画仙は霊地の問題よりもランサーとの関係が悪化するのを優先した。
「聖杯戦争はまだ続くんだ。こいつらもいつまでもここに留まっておくわけにもいかないだろうし、これからここをとる機会はあるだろう。今はここを発見したことを喜ぶべきだろうな」
　そう言って、二人は来た道を引き返す。

　ライダーとそのマスターウェイバー・ベルベットは拠点にしているマッケンジー夫妻の家に帰り着いた。
　真名を解放していない『神威の車輪（ゴルディアス・ホイール）』は比較的魔力の消費も抑えられる移動用としてはかなり強力な宝具だ。
「あら、ウェイバーちゃん。食後にコーヒーはいらないのかしら？」

「いや、今日はやることがあってね」
ウェイバーに好意的に接してくれるマッケンジー夫妻だが、ウェイバーとは縁もゆかりもない一般人である。
これは単にウェイバーの暗示魔術によって作られた偽りの関係に過ぎない。
「あら、そういえばウェイバーちゃんあなたに郵便が着ていたのだけれど」
「え?」
未だ座ったまま、グレン・マッケンジーと酒を飲んでいるライダーが通信販売でTシャツを購入していたことはあったが、自分に郵便が届く心当たりはなかった。
「えーと。アイリスフィール・フォン・アインツベルンさん?」
「なんだって!?」
「あらあら? もしかしてウェイバーちゃんのガールフレンドだったりするのかしら」
「い、いや違うんだ。え、えーと、これはイギリスの学校の講師の一人で……。ああ、とにかくありがとう!」
ウェイバーはマッケンジー夫人が持っていた封筒をひったくるように受け取る。
「おい、もう行くぞライダー」
「おいおい、何を言っている。まだこんなに酒が余っておるではないか」
「いいから!」

「はあ。仕方ない。最近の若者はせっかちでいかん」
「はっはっは！　まあ、若いときには急がんといかんように感じるものですよ」
「はっはっは！　違いありませんな」
　そう言って、残っていた酒を一気に飲み干す。
「それでは、失礼」
　ウェイバーとライダーは二回に上がる。
「で？　坊主。余をわざわざ連れてくるようなことなのか？」
「この封筒。アインツベルンのマスターからだ」
「アインツベルン？　それは一体どういうところだ？」
「セイバーのマスターだ！　昨日説明しただろ！」
　声を荒げるウェイバーだが、そんなものどこ吹く風と受け流しライダーは一人納得したようにつぶやく。
「あの小娘のマスターか。一体何の用だというのだ？　今度こそ我が軍門に降るつもりになったか」
「そんなわけないだろ」
　そういいつつ、ウェイバーは封筒を開く。
「……同盟!?」

「なるほど、小娘のマスターも考えたな」

『今夜11時冬木市民会館前に来られたし』……。どうして、セイバーのマスターがボクたちと同盟を?」

ライダーは目を細めて言う。

「わからんのか、坊主。セイバーのマスターは余の軍勢を見て、それでも余を倒せると踏んだのだ。おおかた、同盟の内容は余とセイバー以外のサーヴァントがいなくなるまで、お互い陣営に対しての不可侵とでも言うつもりなのだろうよ」

「お互いの苦手とするサーヴァントを叩くっていうことか?」

「そうだ。そして、最後は余とセイバーの一騎打ちよ。その場まで想定しているのであれば、セイバーは余の軍勢を突破できるだけの宝具を持っているということになる」

「それじゃ、まずいんじゃないか!?」

それを聞いてウェイバーは慌てた。

『王の軍勢（アイオニオン・ヘタイロイ）』という最強の宝具を正面から破ることができるほどの宝具。ともなればライダーに勝ち目はない。ライダーの持つもう一つの宝具『神威の車輪（ゴルディアス・ホイール）』も強力な宝具だが、それでも宝具としてのランクは『王の軍勢（アイオニオン・ヘタイロイ）』より劣ると言わざるを得ないからだ。

「ということは、他のサーヴァントがセイバーを倒すのを待つしかない？　いやそれだ

と結果が不確定すぎるし、ああもう！　どうすりゃいいんだ！」
「やかましいわ!!」
「ぐわッ!?」
　ライダーの凸ピン一発でウェイバーはベッドまで吹っ飛ばされた。
「少しは落ち着け坊主。まずはこの同盟を受けるのかどうかを決めるのが先であろうが」
「あ、ああ。ごめん。とは言ってもどうするんだ？　受けなかったとしても受けたにしても、セイバーがお前に勝てる自信があるってことに変わりはないんだぞ？」
　不安げに言うウェイバーに、ライダーは自信ありげに胸を張り言った。
「奴に勝つ算段があるというのならそれは余も同じことよ」
「勝てる見込みがあるのか？」
「あの小娘の宝具を見るまでは何とも言えん。が、どちらに傾くのかわからないのが戦の面白いところよ。余にも策ぐらいは建てられるわい。貴様は余のマスターらしくどーんと構えておけばよい！」